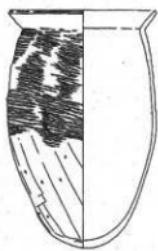


雲仙市文化財調査報告書 第8集

i ko  
**伊古遺跡 III**

弥生時代～中世編

—古江地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告—



2010

長崎県雲仙市教育委員会



## 発行にあたって

このたび平成17年度から平成20年度まで実施しました古江地区圃場整備事業に伴う伊古遺跡の発掘調査の報告書を発行することになりました。当市は平成17年10月11日（10月11日）に7ヶ町（国見町・瑞穂町・吾妻町・愛野町・千々石町・小浜町・南串山町）が合併して誕生し、「豊かな大地・輝く海とふれあう人々で築くたくましい郷土」の実現を目指しています。

伊古遺跡は、島原半島の北側に位置し、標高約20mの扇状地台地上の水田地帯に広がります。西側には西郷川が流れ、遺跡東端は雲仙普賢岳の麓から舌状の丘陵が続きます。遺跡の南側には雲仙普賢岳がそびえ、頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火の生々しさを今に伝えています。北側に目を移せば、眼下に有明海が広がり、佐賀県・福岡県・熊本県まで一望することができます。

これまでにも調査内容を報告（2008・2009雲仙市教委）しておりますが、当遺跡からは、縄文時代から中世までの幅広い時代の遺物・遺構が発見されており、その埋蔵量は計り知れないほどです。昨年報告いたしました、1,500点を超える縄文時代草創期の土器や細石器の検出は、県内でも有数の資料であり、旧石器時代から縄文時代へと移り変わる人々の生活の様子を窺見させます。

今報告では、遺跡より検出された弥生時代から中世における遺構・遺物を報告します。弥生時代の甕棺墓群や環濠と考えられる堀の跡、熊本地方からもたらされたと考えられる土器群、中世の輸入陶磁器類や瓦器・土師器類及び滑石製製品など、数多くの資料が発見されております。特に、古墳時代初頭と考えられる土器群は、熊本地方で作製されたものと考えられ、県内では初めての発見となりました。有明海を越えて人と文化の交流が存在していた証であり、当地に暮らした祖先たちの姿を垣間見ることができます。また、中世における大量の中国製輸入陶磁器類の発見は、これもまた、県内でも有数の規模で、当時の交易史を考えるうえでもまたとない貴重なものとなりました。どの時代においても、当遺跡地が地域社会の中心として機能していたと考えられ、有明海沿岸の歴史・文化を考える上で「鍵」となる遺跡となるでしょう。

雲仙市の緑豊かな農業地帯も、近年の農業基盤整備に伴い大きく変貌しております。このような情勢の中で、祖先の貴重な文化遺産を保護し、これを後世に伝えることは、私たちに課せられた重要な責務であります。本市では、このような事態に対処するため、遺跡発掘調査を行い保存・保護に努めて参りました。そして調査の成果を公開する一つの手立てとして報告書を作成いたしましたが、遺跡の宝庫といわれる本市にとりましては、貴重な歴史と文化を理解するうえで大きな役割を果たすものと期待しております。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、地元地権者の皆様、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県教育委員会学芸文化課の皆様のご指導に衷心から感謝申し上げ、発行のことばといたします。

平成22年3月25日

雲仙市教育委員会  
教育長 塩田貞祐

## 例

- 本報告は平成17年度～平成20年度（2005年～2008年）に実施した古江地区県営圃場整備事業に伴う長崎県雲仙市瑞穂町に所在する伊古遺跡の発掘調査の報告である。
- 調査は旧瑞穂町教育委員会及び雲仙市教育委員会が担当した。現地調査は下記の期間実施した。  
2005年8月17日～2008年10月10日

### 3. 調査体制は次のとおりである。

瑞穂町教育委員会（2005/4/1～2005/10/10）

教育長 小峰 韶雄  
教育次長 小田 雅夫  
係長 内田 啓介  
主査 宮崎 博久

#### 調査担当

文化財調査員 安樂 哲史

雲仙市教育委員会（2005/10/11～2007/3/31）

教育長 鈴山 勝利  
教育次長 辻 政実  
生涯学習課長 岩永 判二  
文化財班班長 柴崎 孝光  
主査 辻田 直人  
主事 徳永 真幸

調査担当  
主査 江崎 亮太  
文化財調査員 安樂 哲史（～2006/3/31）  
文化財調査員 山下 美郷・益田 昼明  
(2006/4/1～)

#### 平成20年度調査体制

教育長 鈴山 勝利（～12/1）  
教育長 塩田 貞祐（3/1～）  
教育次長 塩田 貞祐（～2/28）  
教育次長 山野 義一（3/1～）  
生涯学習課長 川鍋 嘉則  
課長補佐 金子 悅治  
文化財班班長 田中 卓郎  
文化財班係長 柴崎 亮太  
主事 徳永 真幸

#### 調査担当

主査 辻田 直人  
文化財調査員 山下 美郷・小野 綾夏・  
大野 瑞恵  
文化財整理員 早稲田一美・柳原アヤ子・  
林田 崇

#### 平成21年度調査体制

教育長 塩田 貞祐  
教育次長 山野 義一  
生涯学習課長 川鍋 嘉則  
課長補佐 金子 悅治  
文化財班班長 田中 卓郎  
文化財班参事補 江崎 亮太

## 言

係長 辻田 直人  
主任 徳永 真幸  
文化財調査員 小野 綾夏・大野 瑞恵・  
村子 晴奈  
文化財整理員 早稲田一美・柳原アヤ子・  
小笠 智枝

- 現地での遺構・遺物の実測は進藤涼子、前田チイ・吉川新・水谷安孝・東文子・竹田将仁（別府大学）、江崎・安樂・山下・益田が行い、遺物の実測は辻田・小野・大野・村子・早稲田・柳原・小笠が、トレースは早稲田が行った。また、図版の編集・作成は辻田・小野・大野・村子・早稲田・柳原が行い、写真は現地調査を江崎・安樂・山下・益田・辻田・小野・大野が撮影した。掲載遺物写真は小野・早稲田・柳原が行い、写真編集は小野が行った。

- 現地での遺構実測の一部は㈱埋蔵文化財サポートシステム長崎支店、及び、㈱順精光に委託した。出土遺物実測の一部は㈱埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。

- 空中写真撮影業務は㈱九州文化財研究所及び㈱スカイサーバイ九州に委託した。

- 本遺跡の遺物及び写真・図面等は雲仙市国見神代小路歴史文化公園歴史民俗資料館で保管している。

- 本書用いた方位はすべて真北であり、国土標は世界測地系による。

- 現地調査および本書の刊行にあたり多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。長岡信治（長崎大学教育学部教授）、木本雅康（長崎外国语大学）、早田勉（㈱火山灰考古学研究所）、川道寛（長崎県教育委員会）、渡邊康行、杉原敏之（福岡県教育委員会）、本田秀樹（長崎県立北高等学校）、山口勝也（㈱埋蔵文化財サポートシステム）、竹中哲朗（㈱早市委教育委員会）、平田賛明、長崎県学芸文化課、長崎県島原振興局農村整備課、西郷土地改良区、雲仙市農漁村整備課、長崎県考古学会、瑞穂史談会、柴崎建設、順宝建設、富士建設（順不同）

- 本書の執筆は辻田・小野・大野・村子が分担し、各章及び各節文末に執筆者名を記した。

- 本書の編集は江崎の協力を得、辻田・小野・大野・村子による。

# 目 次

巻頭図版

発行にあたって

例言

本文目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 調査の経緯 ..... 1 p

　第1節 発掘調査にいたる経緯（辻田） 第2節 発掘調査の方法及び経過（辻田）

　第3節 遺跡の地理的・地形的環境（辻田）

第2章 弥生時代～古墳時代 ..... 4 p

　第1節 弥生時代（小野） 第2節 弥生時代終末～古墳時代初頭（小野）

第3章 中世 ..... 26 p

　第1節 検出遺構（辻田） 第2節 出土遺物（大野・小野）

第4章 まとめ ..... 74 p

　第1節 総括（小野） 第2節 まとめ（小野・村子）

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/20,000)	
第2図 調査区配置図 (1/1,775)	3
第3図 F区壺棺・ミニチュア土器出土状況 (壺棺1/12・土器1/6)	4
第4図 3号壺棺検出状況 (1/20)	5
第5図 1号壺棺検出状況 (1/20)	5
第6図 2号壺棺検出状況 (1/20)	5
第7図 F区出土壺棺 (1/6)	7
第8図 F区・F'区出土土器 (1/3)	8
第9図 市道試掘調査壺棺出土状況 (1/20)	8
第10図 市道出土壺棺 (1/6)	9
第11図 ウッドサークル検出地点 (H・Q4・R区) (1/400)	10
第12図 H・Q4区ウッドサークル検出状況 (1/200)	11
第13図 H区ウッドサークル出土遺物 (1/3)	13
第14図 H区出土土器 (長頸壺) (1/3)	14
第15図 H区出土土器 (器台) (1/3)	14
第16図 伊古遺跡I・J区 (1/400)	16
第17図 J区SX-01壺棺出土状況 (1/20)	17
第18図 J区SX-02壺出土状況 (1/20)	17
第19図 J区SX-01・SX-02出土土器 (壺棺・壺) (1/6)	17
第20図 Q区SD-1・Q・R区SD-3検出状況 (1/400) Q区SD-1土器検出状況 (1/100)	19
第21図 Q区出土土器 (壺) (1/3)	21
第22図 Q区SD-1出土土器 (壺・壺) (1/3)	22
第23図 Q区SD-1出土土器 (鉢・高杯) (1/3)	23
第24図 Q区SD-1出土土器 (高杯) (1/3)	23
第25図 Q区SD-3出土土器 (壺) (1/3)	24
第26図 Q区土坑出土土器 (鉢) (1/3)	24
第27図 D3区出土土器 (1/3)	25
第28図 JT-1出土土器 (壺) (1/3)	25
第29図 S区掘立柱建物検出状況 (1/100)	27
第30図 S区1号掘立柱建物 (1/50)	28
第31図 S区2号掘立柱建物 (1/50)	29
第32図 S区3号掘立柱建物 (1/50)	30
第33図 C区土坑墓検出状況 (1/50・拡大図1/25・遺物1/6)	31

第34図	H区土坑群検出状況（1/100・土坑断面 1/50・出土遺物 1/6）	33
第35図	H区土坑群出土遺物（1/3）	33
第36図	龍泉窯系青磁①（1/3）	35
第37図	龍泉窯系青磁②（1/3）	37
第38図	龍泉窯系青磁③（1/3）	39
第39図	龍泉窯系青磁④（1/3）	41
第40図	龍泉窯系青磁⑤（1/3）	42
第41図	同安窯系青磁①（1/3）	44
第42図	同安窯系青磁②（1/3）	46
第43図	同安窯系青磁③（1/3）	48
第44図	同安窯系青磁④（1/3）	50
第45図	同安窯系青磁⑤（1/3）	51
第46図	高麗青磁（1/3）	51
第47図	白磁①（1/3）	53
第48図	白磁②（1/3）	55
第49図	白磁③（1/3）	57
第50図	白磁④（1/3）	59
第51図	白磁⑤（1/3）	61
第52図	白磁⑥（1/3）	63
第53図	青白磁（1/3）	64
第54図	土師質土器（1/3）	65
第55図	瓦器①（1/3）	67
第56図	瓦器②（1/3）	69
第57図	瓦器③（1/3）	71
第58図	瓦器④（1/3）	73

## 表 目 次

第1表	S区検出掘立柱建物群構成表	30
第2表	出土土器観察表	77
第3表	出土土器観察表	78
第4表	出土土器観察表	79
第5表	出土土器観察表	80
第6表	中世土坑墓遺物一覧表	80
第7表	中世遺物一覧表（貿易陶磁器・青磁①）	81

第8表 中世遺物一覧表（貿易陶磁器・青磁②）	82
第9表 中世遺物一覧表（貿易陶磁器・白磁①）	83
第10表 中世遺物一覧表（貿易陶磁器・白磁②）	84
第11表 中世遺物一覧表（貿易陶磁器・白磁③）	85
第12表 中世遺物一覧表（貿易陶磁器・青白磁）	85
第13表 中世遺物一覧表（土師質土器）	85
第14表 中世遺物一覧表（瓦器①）	86
第15表 中世遺物一覧表（瓦器②）	87

## 図版目次

- 中表紙図版 遺跡上空より有明海を望む（中央に流れる西郷川）
- 卷頭図版① 遺跡上空写真（圃場整備事業の進む伊古遺跡・平成20年）
- 卷頭図版② 遺跡上空写真（D 6 区）
- 卷頭図版③ 遺跡上空写真（E 区・道路状遺構）（上）  
道路状遺構（北半分）（左下） 道路状遺構（南半分）（右下）
- 卷頭図版④ 遺跡上空写真（H 区・ウッドサークル・中世土坑群・後ろは雲仙普賢岳）（上）  
H 区 ウッドサークル（左下） H 区 土坑群（右下）
- 卷頭図版⑤ 遺跡上空写真（J 区・後ろは雲仙普賢岳）

図版 1  
遺跡上空写真（昭和38年国土地理院）

図版 2  
F 区 3 号壺棺検出状況（北側より）  
F 区 1 号壺棺検出状況（北側より）  
F 区 2 号壺棺検出状況（東側より）  
市道・SK-7 壺棺検出状況（北側より）  
H 区 ウッドサークル検出状況（北側より）  
ウッドサークル内小ピット検出状況  
H 区 全景（北側より）  
ウッドサークル検出作業風景

図版 3  
Q 4 区 ウッドサークル検出状況（北側より）  
R 区 ウッドサークル検出状況（北側より）

I 区 SD-1 検出状況（北側より）  
SD-1 土層（南側より）  
J 区 SX-01 壺棺検出状況（北側より）  
J 区 SX-02 壺検出状況（東側より）  
Q 区 全景（西側より）  
Q 区 SD-1 検出状況（東側より）

図版 4

- Q区 S D-1 検出状況近景（東側より）  
Q区 S D-1 遺物出土状況（北側より）  
Q区 S D-1 遺物出土状況近景（西側より）  
Q区 S D-1 土層（北側より）  
Q区 R区 S D-3 検出状況（南東側より）  
Q区 R区 S D-3 土層（北側より）  
J T-1 全景（南側より）  
J T-1 龟出土状況（東側より）

図版 5

- S区 挖立柱建物 1号 2号 検出状況（北側より）  
S区 挖立柱建物 3号 検出状況（北側より）  
S区 挖立柱建物群全景（南東側より）  
S区 挖立柱建物群 S P-93 検出状況（西側より）  
H区 中世土坑墓群（北側より）  
H区 S K-5 検出状況  
H区 S K-36 検出状況  
H区 中世土坑墓群検出風景（南側より）

図版 6

- F区・市道出土甕棺（7頁第7図、9頁第10図）

図版 7

- F区・F'区・H区出土土器（8頁第8図、13頁第13図、14頁第14・15図）

図版 8

- J区・Q区出土土器（17頁第19図、21頁第21図、22頁第22図、23頁第23図）

図版 9

- Q区・D3区・JT-1・H区出土土器（23頁第23・24図、24頁第25・26図、25頁第27・28図、33頁第35図）

図版10

- 龍泉窯系青磁（35頁第36図～42頁第40図）

図版11

- 同安窯系青磁（44頁第41図～51頁第45図）

図版12

- 高麗青磁・白磁①（51頁第46図～59頁第50図）

図版13

- 白磁②・青白磁（59頁第50図～64頁第53図）

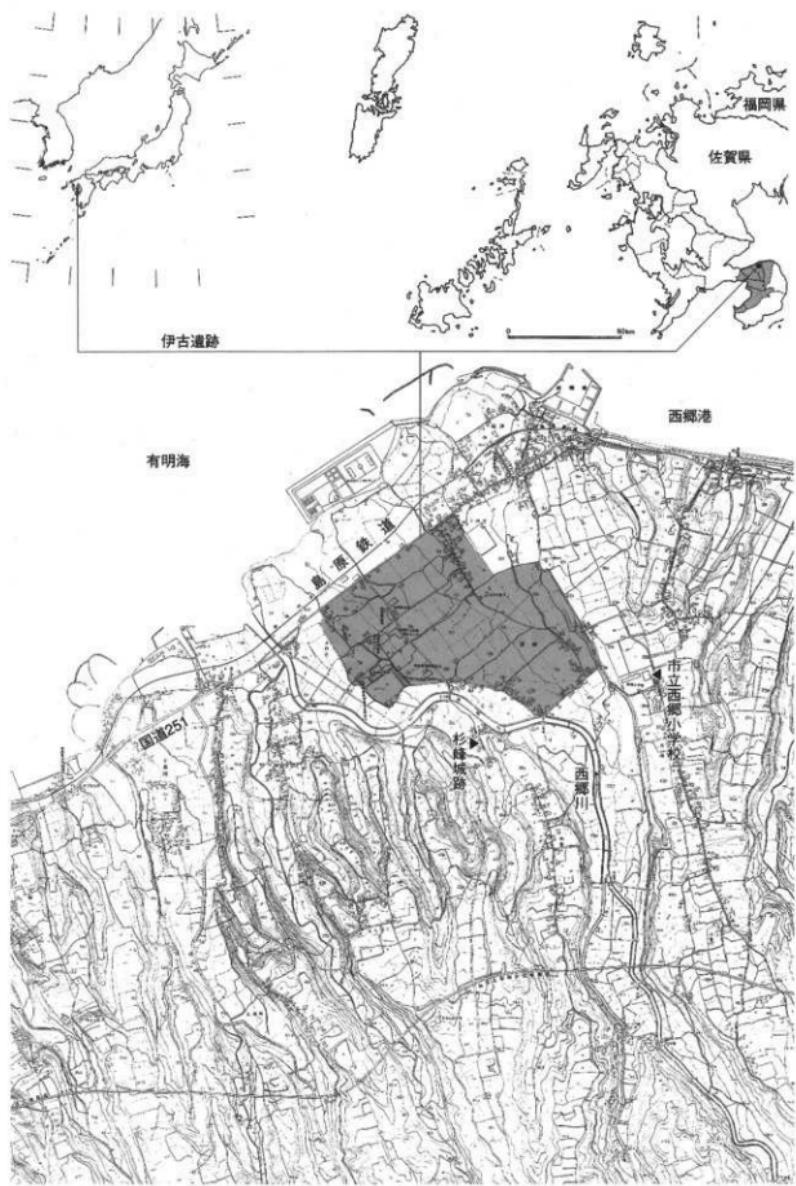
図版14

- 土師質土器（小皿）（65頁第54図）

- 瓦器①（67頁第55図～69頁第56図）

図版15

- 瓦器②（69頁第56図～73頁第58図）



第1図 遺跡位置図 (1/20,000)

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 発掘調査にいたる経緯

平成13年度に長崎県島原振興局より、古江地区県営圃場整備事業の計画があるとの紹介を受け、瑞穂町教育委員会（現雲仙市教育委員会）が主体となり、平成14・15年度に事業予定地内の遺跡範囲確認調査（試掘調査）を実施した。その結果、従来の周知遺跡である伊古遺跡をはるかに越える範囲で遺構・遺物の発見が確認され、伊古遺跡の周知範囲は南東に大きく広がりをみせることになった。試掘調査の結果を踏まえ、島原振興局・長崎県学芸文化課・西郷土地改良区・瑞穂町教育委員会（現雲仙市教育委員会）による協議の結果、設計変更により遺跡の大部分は盛り土により保存を行うことになったが、遺跡の消滅する部分については発掘調査を行うことになった。本調査は、平成17年度～平成20年度まで、3カ年にわたりて実施し、今報告書では調査全体の内容について報告する。今回報告する調査は、道路および用排水路建設のために遺跡が破壊される部分について、長崎県島原振興局より委託を受けて行ったものである。（辻田）

## 第2節 発掘調査の方法及び経過

本調査は世界測地系を使用し、調査対象範囲（道路・用排水路建設のために遺跡が消滅する範囲）を、20mもしくは4mメッシュに区切り、グリッド法によって行った。A区、B区、C区、D1区、D2区、D3区、D4区、D5区、D6区、E区、E'区、F区、F'区、G区、H区、I区、J区、J1T区、J2T区、K1～6区、L区、M区、N区、O1～5区、P1区、P2区、Q1区～Q4区、R区、S区、T区、U区、V区を設定し、順次調査を実施した。しかしながら、調査区の立地条件や遺構密度などにより、必ずしも20m、4mメッシュの調査区とはなっていない。

伊古遺跡は概ね水田として利用されており、条里制の痕跡も見られることから、これまでに数度の造成工事が実施されていると考えられる。したがって、表土を除去すると遺物包含層がまったく存在せず、基盤層に掘り込まれた遺構確認面が露出する部分も少なくない。各調査区の表土は重機で掘削を行い、遺構確認面または遺物包含層まで再度重機による掘削を行っている部分もある。その後の掘削は概ね人力によるが、下層の土層確認のために再度重機による掘削を行った部分もある。

遺物については、包含層遺物は一括で取り上げ、甕棺など遺構に間わるものについては可能な限り実測し取り上げた。また、段階的に発掘状況の写真を撮影した。縄文時代の遺物については文化層と考えられる包含層については基本的にドットマップを作成している。以下調査概要を述べる。

一昨年度及び昨年度において一部報告（山下2008・辻田2009）を行っているが、伊古遺跡からは縄文時代～近世に至るまでの多種多様な遺構・遺物が検出されている。

縄文時代では草創期末の細石器群が検出されている。雲仙より続く丘陵崖下で集中して検出されており、洞穴遺跡をイメージさせる「崖下遺跡」と考えられる（辻田2009）。土器や石器（報告書では尖頭状石器）、石斧なども共伴しており、有明海沿岸の草創期末の状況を考える上で重要な成果である。

中世では礫により舗装された道路跡や掘立柱建物群、多くのピットや土坑などから大規模な集落が展開していたことは間違いない。出土遺物から多くの中中国製陶磁器の出土や祭祀遺構と考えられる土器群の集中（1m<sup>2</sup>あたり100点以上）等（山下2008）が見られ、そのことを裏付けている。また、製鉄関連の遺構・遺物も多く見られ、いまだ不明な部分の多い、島原半島の中世の様相解明に貴重な成果となろう。（辻田）

### 【参考文献】

- 山下美郷 2008『伊古遺跡』雲仙市文化財調査報告書（概報）第5集 長崎県雲仙市教育委員会  
辻田直人 2009『伊古遺跡II』雲仙市文化財調査報告書 第6集 長崎県雲仙市教育委員会

### 第3節 遺跡の地理的・地形的環境（第1図）

伊古遺跡周辺の地理的・地形的環境については一昨年度の概報（山下2008）に詳しいので、参照願いたい。ここでは遺跡本体の立地する環境について説明する。

伊古遺跡は島原半島の北端に位置し、雲仙普賢岳から伸びる緩やかに傾斜する火山性山麓扇状地に占地する。遺跡の西端には西郷川が北上し、東端は雲仙普賢岳より続く舌状の丘陵が海岸付近まで延びており、川と丘陵に挟まれた平坦部に展開している。西郷川の西側にも雲仙からの丘陵が延びており、その先端には、中世在地豪族の居城である「杉峰城跡」が隣接している。さらに西側にも同様の人指状に延びる丘陵が見られる。これらの丘陵は、雲仙普賢岳より延びる丘陵の先端部で、伊古遺跡東側の丘陵と標高はほとんど同様であるが、海岸部まで延びることはい。西郷川はその丘陵先端部をかすめるように大きく西に蛇行して流れ、有明海へと注いでいる。

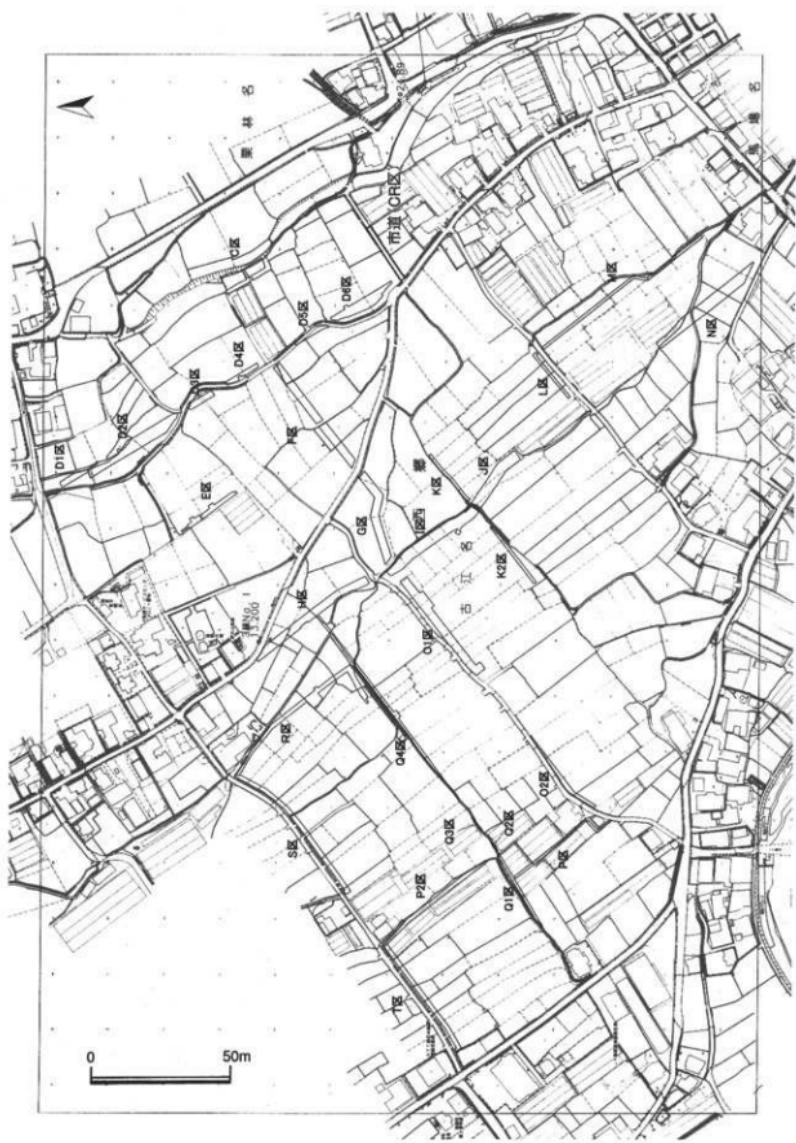
圃場整備事業に伴う発掘調査において、伊古遺跡内に、縦横にトレンチを入れるがごとく調査（第2図）を実施した結果、頻繁に旧河川跡と考えられる水成堆積による砂礫層を検出した。西郷川は西側に延びる丘陵の先端部（杉峰城跡）付近で大きく西側へ蛇行するが、そのまま北上あるいは支流が北上していた時期があろうことは地形的にも十分考えられることであり、発掘調査によってそのことが実証される結果となった。検出された砂礫層のほとんどは遺物を含んでおらず、扇状地の基盤となる堆積物と考えられるが、弥生時代及び中世の遺物を多く包含する砂礫層もみられる。

今回報告する弥生時代～中世の遺構・遺物が検出された部分は、遺跡平野部の全体に広がっているが、概ね遺跡東側に連なる、雲仙普賢岳より延びる丘陵に近づくにつれて検出密度が濃くなる。昨年度報告した草創期末の細石器群については、丘陵直下の崖下のみで検出されると言っても過言ではない。報告書には記載していないが、D 6区東側では1点ではあるが押型文土器が検出されており、草創期及び早期前半の遺跡の立地を推測することができる。

弥生時代～中世の遺物・遺構は、D区～K区、O区～R区、T区で見られる。特にF区では甕棺墓群、I区・J区では住居跡や環濠と考えられる遺構、H区ではウッドサークルが検出され、弥生時代の大規模環濠集落が展開していた様子がうかがえる。今報告にもあるとおり、墓域については1箇所だけの検出ではなく、長期にわたって集落が存続していた様子も見受けられる。前述したように伊古遺跡内からは無数の旧河川跡が検出されており、弥生時代の遺物が検出される河川が、G区からH区を通りR区・S区北側まで流れる。また、P区・Q1区・T区を通り北上するものも見られる。いずれの河川でも河床に手を加えた痕跡（前者：ウッドサークル、後者：河床や護岸の整地）が見られ、河川を利用した集落の成立が見受けられる。中世になるとそれらの河川はすでに埋没し、D区に沿うように流れる河川跡しか検出されなくなる。当地は中世以前に条里制の施行があったと考えられ、その際に整地作業が行われていると考えられる。

中世の遺物・遺構は、C区・D区・E区・H区・S区で見られる。C区・H区では墓域と見られる土坑群が検出され青磁・白磁の副葬も見られる。D区の河川跡からは大量の青磁・白磁・瓦器碗などが検出され、E区では道路状遺構（山下2008）、S区では掘立柱建物の検出がみられ、広範囲に集落が展開していた様子がうかがえる。弥生時代と異なり、河川跡と考えられる場所はD区周辺のみである。E区で検出された道路状遺構は条里遺構の方向と重なり、条里遺構に沿った整然とした町並みも予想されよう。

伊古遺跡は西側を流れる西郷川の作用により堆積した扇状地上に展開した遺跡である。（辻田）



第2図 調査区配置図 (1/1,775)

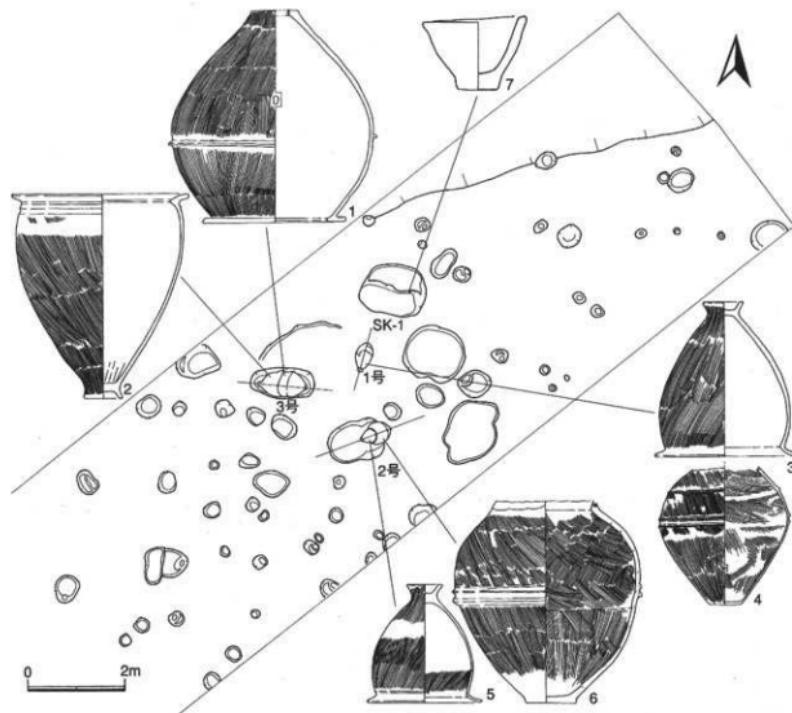
## 第2章 弥生時代～古墳時代

### 第1節 弥生時代

#### 一、斎場一

今回の調査で検出した斎場は、F区で3基、市道の調査で1基である。F区は斎場3基の他に、ピットが177基、土坑が23基、風倒木が6基検出されている。斎場から5m離れた部分で検出されたSK-1の風倒木からは、丹塗り須玖式壺のミニチュアが出土している。斎場は全て、肥後系の黒髮式と北部九州系の須玖式で合せ口斎場としている。いずれも小さく小児斎場であることが分かる。特に1号斎場は他に比べると非常に小さく、小児斎場の中でも、乳児用だったことが推測できる。これらは第3図を見て分かるように3基とも密接して、出土している。伊古遺跡の斎場墓は、熊本地方の影響を受けている。

F'区はF区を西側に延ばした延長上である。F区と同じく、ピットや風倒木が多数検出されている。検出面が基盤層に近く、耕作による削平を受けており、遺物もわずかに見られただけである。遺構は、判断しにくいが、調査区西側に隅丸長方形形状にめぐらビット群が検出できている。F'区の風

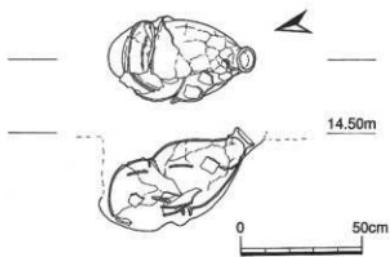


第3図 F区斎場・ミニチュア土器出土状況（斎場1/12・土器1/6）

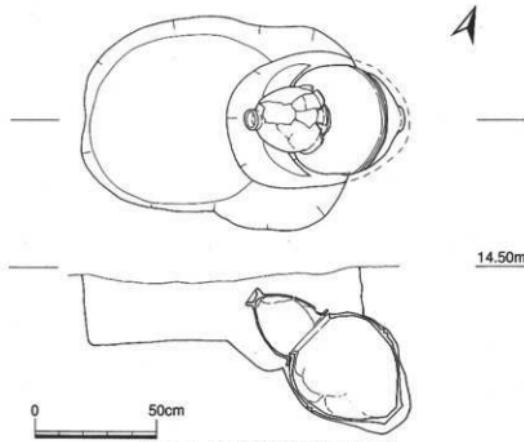
倒木では、第8図10の丹塗りの高壺が出土している。壺部のみ非常にきれいに残存していた。この高壺は弥生終末の形状を呈す。他にも免田式長頸壺の胴部片が出土しており、弥生後期に属する。時期にややズレが生じるが、おおよそ弥生中期～後期に当たはまり、北部九州系と肥後系の土器が出土していることが分かる。(小野)



第4図 3号壺棺検出状況（1/20）



第5図 1号壺棺検出状況（1/20）



第6図 2号壺棺検出状況（1/20）

## 一出土甕棺一

### F区3号甕棺

1は上甕で須玖式の特徴を持っている。口縁部はほぼ水平の鋸先口縁を呈し、最大径部分に断面方形の突帯が1条めぐっている。底部は平底を呈しているが、中央に穿孔が見られる。外面は、突帯より下は4段階の縦位のハケ、突帯より上は2段階の縦位のハケを行っている。内面は約3cmの粘土帶を積み上げて作っている痕跡が明瞭に残り、ナデと指頭圧痕できれいに整えている。

2は下甕で黒髪式の台付甕である。口縁部は外反し、内側につまみ出している。脚台部は小さく、胴部上位が張っている。頸部直下には断面三角形を貼り付けではなく削り出して作っておりその後ナデで整えて、突帯を意識している。外面は口縁部から突帯下までは横位のナデ、その下からは細かい斜位のハケが下から上方向に向かって行われている。当初は上までハケを行っていたようだがその後にナデ消している。内面は底部にケズリを行った痕跡が若干残り、全体はナデと指頭圧痕で整えている。

### F区1号甕棺

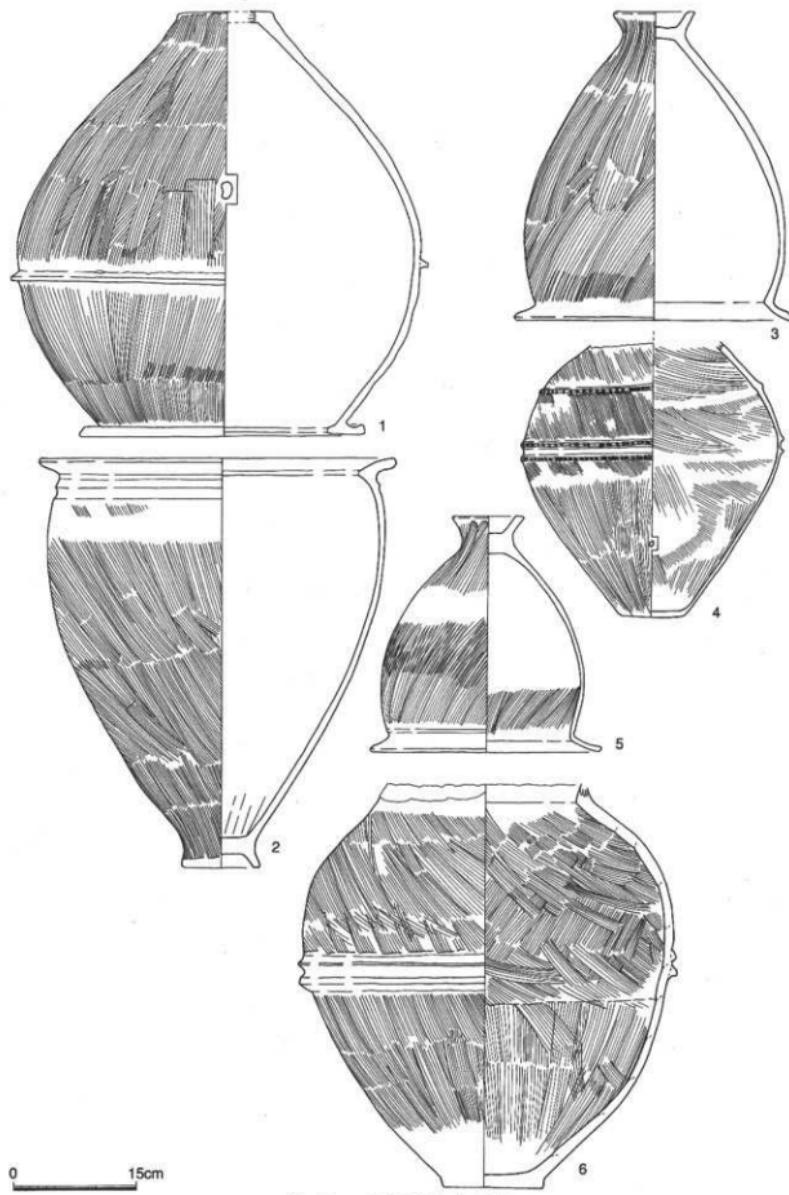
3は上甕で肥後系の台付甕である。口縁部は「く」の字を呈し外反する。頸部は締まりが甘く、胴部上位に最大径を持っており、非常に張っている。底部に向かうにつれて細くなってしまい、短めの台裾部につながる。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、胴部外面は上位が斜位のハケ、胴部中位から下は縦位のハケである。胴部内面はハケを行っている。

4は下甕で須玖式である。口縁部は頸部から人為的に打ち欠いている。底部は中位がやや出っ張った平底。胴部上位に最大径を持ち、その部分に断面方形の刻目突帯を2条、肩部にもう1条断面三角形の刻目突帯が貼り付けられている。全ての突帯の刻目は4本を1単位としているようである。胴部上位・中位ともに横位のハケ後横位のナデで整えてその上から斜位のハケを行っている。胴部下位は底部から上に向かって縦位のハケを行っている。内面は、胴部上位～中位は横位と斜位のハケ、中位より下は縦位のハケ、外面に突帯のある部分の内面は横位のナデを施している。

### F区2号甕棺

5は上甕で黒髪式の台付甕である。全体的に作りが丁寧で、胎土に含まれる粒子が非常に少なく精製されている。口縁部は長く、外反しており、頸部は締まりがよく、胴部は張りが強い。脚台部は小さい。頸部直下には突帯を意識したようなラインが1条見られる。口縁部は内・外面ともに横位のナデを施している。外面は頸部直下より胴部中位のやや下まで2段階に斜位のハケ、甕の底部から脚台部にかけて斜位のハケ、その間はハケをナデ消している。内面は胴部上位のみ斜位のハケと縦位のハケを行っている。脚台部内面は回転利用の丁寧なナデとハケを施している。

6は下甕で頸部から人為的に打ち欠いている。胴部中位に断面三角形と断面方形の突帯2条が貼り付けられている。底面は平底。全体的にすんぐりしている。外面は、突帯より上は3～4段階の斜位のハケ、下は2段階の縦位のハケを行っており、底部付近はナデ消である。部分的に丹塗りと思われる痕跡と穿孔がある。内面には作る際に積み上げた11段の粘土帶の痕跡がはっきりと見られ、その痕跡を消すかのように斜位のハケが交互に行われている。胴部中位辺り、7段目の明瞭に残る粘土帶痕より下は縦位のハケである。(小野)



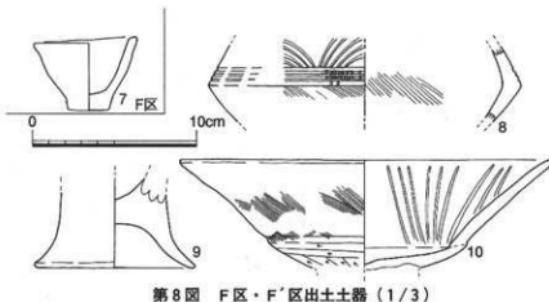
第7図 F区出土櫛棺 (1/6)

### 一出土土器一

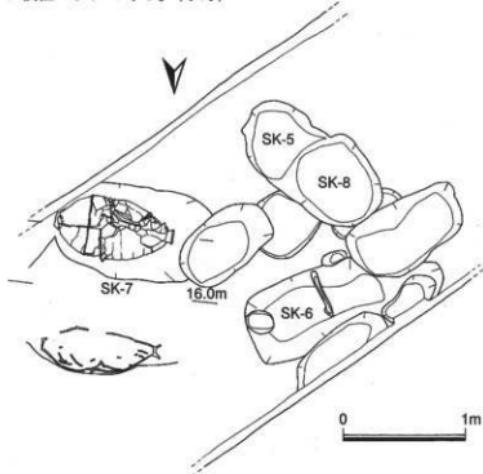
第8図は、F区及びF'区で出土した土器で特徴のあるものを図示している。

7はミニチュア土器の壺である。壺棺出土地点側の土坑(SK-1)から完形で出土している。この土坑はおそらく風倒木である。底部は平底を呈し、頸部分を意識した若干のへこみが見

られる。口唇部は平らに作っている。手捏ねなので、指頭圧痕やナデが明瞭に残り、その後に外面のみ全体にミガキを行っている。須玖式壺の特徴を呈している。9は台付壺の脚台部である。台裾部は外反しており、全体的に横位のナデを施している。8は小さい破片資料であるが、免田式の長頸壺の胴部屈曲部である。胴部は免田式の特徴をよく表した算盤玉型である。外面には屈曲部より下は斜位のハケ、上には刻目文を施す平行沈線文が3条、その上に重弧文が施されている。10は高坏の坏部である。こちらは風倒木からの出土で、坏部のみほぼ完形であった。有段で、坏部下半は浅く、長くて外反する口縁部がつく。外面は坏部下半が下部分に縦位のケズリ、その上に横位のケズリ、段部分と口縁部には斜位のハケが部分的に残っている。内面は口縁部に暗文風のミガキを行っている。全体的に横位のナデである。(小野)



第8図 F区・F'区出土土器 (1/3)



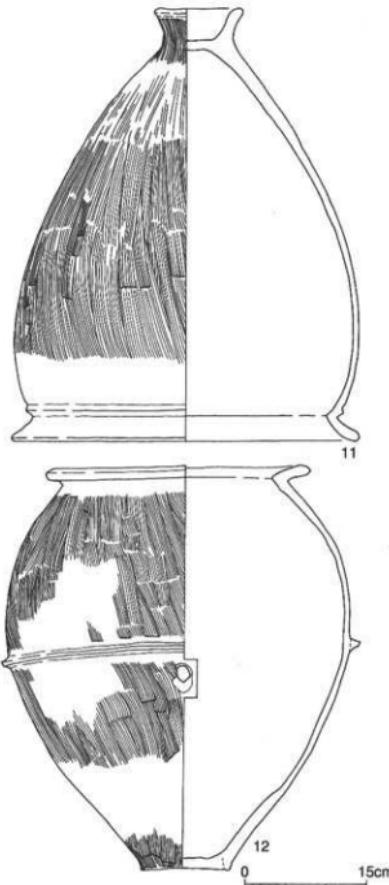
第9図 市道試掘調査壺棺出土状況 (1/20)

### 一市道・SK-7-

市道の調査では、調査区の中央部分で土坑が4基、ピットが5基検出されている。中世の人骨を含む土坑墓7基と甕棺墓1基で、お互いに切り合っている(第9図)。SK-5・8は人骨と土師器を含んでいた。SK-6は図を見ても分かるように、おそらく合せ口甕棺の口縁部分の痕跡と考えられる部分が検出できている。甕棺は、肥後系の黒髮式台付き甕と北部九州系の須玖式での合せ口甕棺である。F区で検出されている甕棺とほぼ同じものなので、時期も同じく弥生時代中期の小児棺であることが言える。甕棺は1基だったが、中世の土坑墓もあるため、時代は違うが同じ場所を墓域として使用していることが何える。周辺では下水道工事立ち会いの際に、北部九州系の甕棺片(約30cm大)が発見されており、この辺りが墓域であった可能性も考えられる。調査区内全体的には河川氾濫跡も検出されており、遺物は弥生時代～古墳時代の古式土師器や須恵器が多く出土している。その中でも弥生の遺物が非常に多く見られた。このため、近隣に良好な弥生の集落が存在していた可能性も予想できる。そして、この市道周辺は墓域であったことが考えられる。

11の上甕は台付甕である。口縁部直下には断面三角形の突帯が1条めぐらしている。胴部上位が最も張りが強く、小さめの脚台部が付く。口縁部は「く」の字状を呈しており、口唇部に向かって肥厚している。頸部はやや締まっている。外面は、胴部の上位～中位まで縦位のハケ、脚台部縦位のハケを施している。

12の下甕は胴部最大径が胴部中位に位置しており、その部分に断面方形の突帯を貼り付けている。底部は平底を呈している。口縁部は鋸先状口縁を呈しており、口縁部先端が外側に垂れ下がっている。突帯辺りに穿孔を持つ。外面は、突帯より上は約3段階の縦位のハケ、突帯より下は2段階の縦位のハケである。底部部分にも縦位のハケが見られる。内面はナデ。(小野)

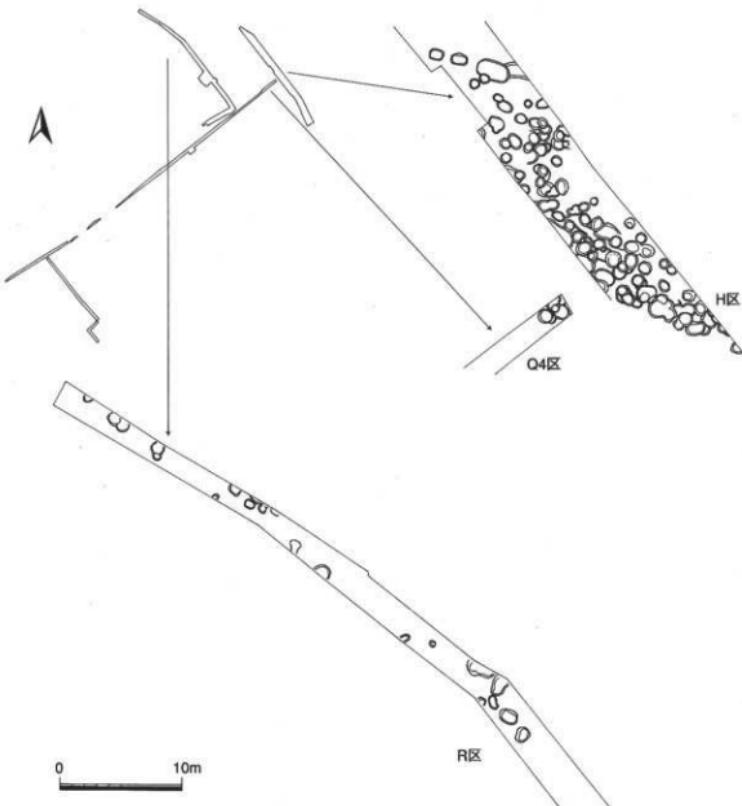


第10図 市道出土甕棺(1/6)

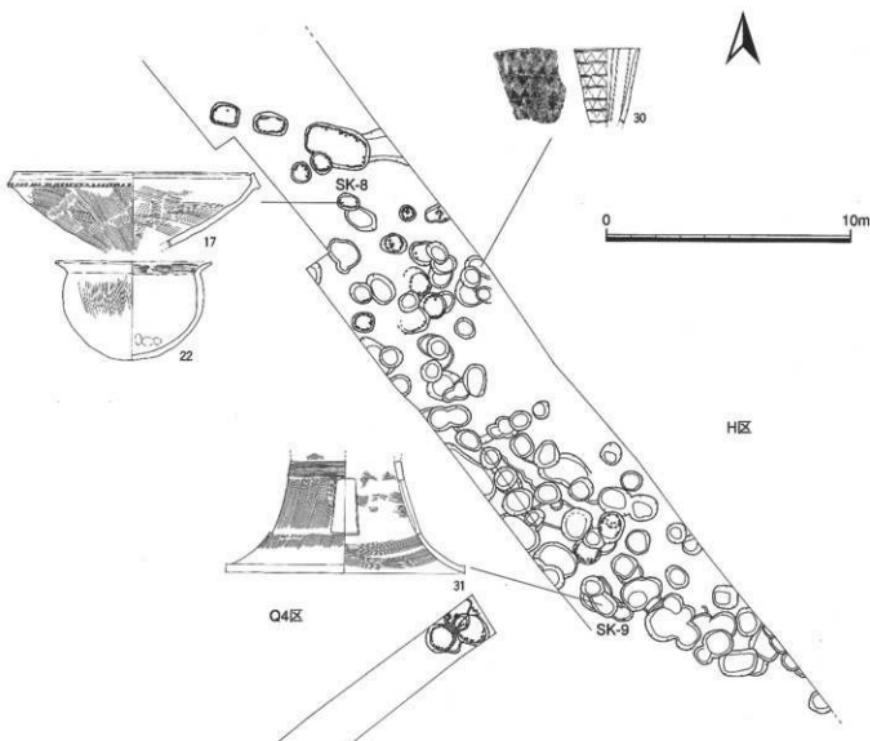
## 一遺構一

### H区・木製品水漬遺構

H区で検出されたウッドサークルは、平成8年～10年まで調査が行われた同じ雲仙市内の国見町佃遺跡でも検出されており、長崎県内では今回で2例目の報告となる（辻田2008）。伊古遺跡で検出されたウッドサークルの総数は約113基あるが、ほとんどが切り合っており、正確な基数を把握するのはなかなか困難であった。平面形状は大小様々で、円形・椭円形・隅丸方形・不定形など、大きい土坑で径約2.5m、小さいもので径約1mである。土坑の深さもまちまちで、立ち上がりのみのものや深いもので1m以上あるものもあり、これら全ての遺構の性格が佃遺跡と同様である。水を土坑に取り入れるための流路があるものも見られた。佃遺跡ではほとんどの土坑で確認できた底面部分に残る木杭の痕跡と考えられる小ピットが検出できる土坑も、伊古遺跡ではいくつかあるが確認できた。福岡県北九州市の長野小西田遺跡でも似たような遺構が確認されており、木製品が実際に漬けられた状態や、木杭が刺さったままの状態で検出されているため木製品水漬遺構とされている。島原半島



第11図 ウッドサークル検出地点（H・Q4・R区）(1/400)



第12図 H・Q4区ウッドサークル検出状況（1/200）

では木製品などの有機質遺物は残存しにくいため、長野小西田遺跡のように木製品や杭そのものの検出はない。しかし、佃遺跡も伊古遺跡も土坑の形状に沿って環状に底面に木杭を刺していた痕跡と考えられる小ピットが見られる。その底面の小ピットが検出される前には、黒色の粘質土層が薄く堆積していた。これは、木製品が月日の流れで腐食して堆積した可能性もあり、長野小西田遺跡と同様の木製品水漬遺構と判断してもいいだろう。出土した中でも最も多いものは弥生中期の肥後系であるが、その中でも凹線文を施した瀬戸内系の特徴を持つものも若干見られた。SK-8から出土している遺物は河川堆積の割に丸くなつておらず、破片も大きい。その破片も器台や高壺であるため、何らかの水場の祭祀に使われた可能性も示唆できる。調査でウッドサークルが検出され始めてからの遺物は、古くて弥生時代中期のものから新しくて古墳時代初頭のものが見られた。よって、このウッドサークルは少なくとも弥生時代中期頃には河川堆積の遺物と一緒に河川が埋まり始めたと考えられる。

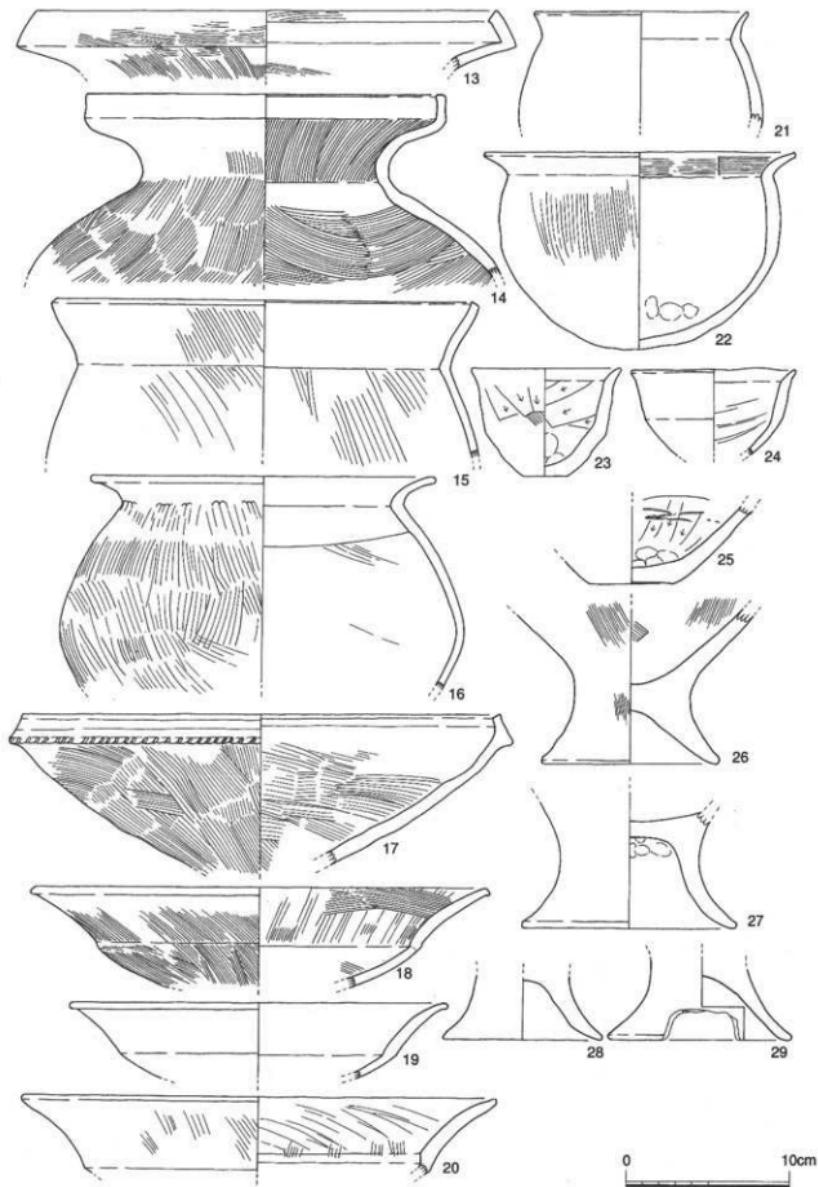
（小野）

#### 【参考文献】

- 前田義人 2000 「長野小西田遺跡の水場の遺構」『考古学ジャーナルNo457』 ニュー・サイエンス社  
辻田直人 2008 「佃遺跡」雲仙市文化財調査報告書（概報）第4集 長崎県雲仙市教育委員会

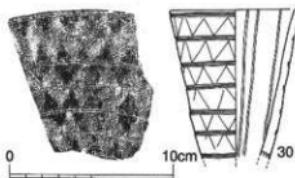
## 一H区・木製品水漬遺構出土土器一

13は「く」の字を呈する複合口縁壺である。口唇部は内側に斜めに切っている。外面は屈曲する部分より下は縦位のハケ、上は短めの横位のハケを施す。内面は口唇部に横位のハケ、屈曲部より上はケズリ、下は横位のハケ、頸部近くになると下から上に向かって斜位のハケを施している。14はかなり大きい複合口縁壺である。口唇部は内側に丸くおさめている。2次口縁は直立しており、横位のナデが残り、指で立ち上げた感が残る。1次口縁は内面が斜位のハケ、外面は頸部に若干縦位のハケが残る。胴部外面は斜位のハケ、内面は回転を利用した横位のハケである。15はおそらく台付き壺の口縁部から胴部である。肩部は口縁部径より長く、張っている。内・外面ともに斜位のハケを施している。16は口縁部が外反し、口唇部で丸くおさめる。胴部上位で最大径がくる。高さはあまりない。外面が頸部から縦位と斜位の乱雜なハケ、口縁部は内・外面ともに横位のナデ。内面は横位のナデで部分的に斜位のハケ残る。丁寧なナデも見られる。17は高坏の坏部である。口縁が強く内湾する。逆「く」の字形をしている。外面は斜位と縦位のハケ後にナデ消しを行っている。口縁部は横位のナデを施している。「く」の字になる角の部分には爪形による押圧が見られる。内面は横位のハケ後に部分的にナデ消しが見られる。口縁部は横位のナデを施し、口唇部は若干面取りしている。残存状況は非常によい。外面に焼成時の炭・ススが付着している部分がある。18は高坏である。口縁部は長く外反しており、坏部下半は浅い。外面は口縁部分と坏部下半部分を分けて斜位のハケを行っている。内面は口縁部分が暗文風のミガキを行った後、上の方は横位のハケ、その下は縦位のハケを行っている。坏部下半は横位のハケである。19は高坏の坏部片である。口縁部は外反し、口唇部は丸く外湾する。全体的に横位のナデを施している。20は浅い高坏である。坏部下半はかくっと曲がっている。外面は横位のナデ後に斜位のハケ、内面は斜位のミガキを行った後屈曲部分のみ縦位のハケである。21はおそらく台付き壺の口縁部から胴部である。胴部中位に最大径を持ち、口縁部は短い。内・外面ともにナデで調整を行っている。22は口縁部を持つ鉢である。底部は丸底で、胴部最大径は中位よりやや上有る。口縁部は短く、「く」の字に開き外反する。外面は胴部上位は縦位のハケが施され、その後ナデによって若干消されている。口縁部、胴部下半は丁寧なナデ調整施がされている。内面は胴部上位は斜位のケズリ、下半はナデ後に指頭圧痕が見られる。口縁部は横位のハケ後にナデを行っている。胎土に角閃石を多く含んでいる。残存状況が50%である。23は小型の鉢である。口縁部は短く外反しており、底面は平底を呈している。外面は斜位のケズリとハケ後にナデが施されている。内面は上位に斜位のケズリ後にナデ、下面がナデと指頭圧痕を行っている。やや手捏ねの様に仕上がっていいる。24は小型の壺である。口縁部は短く、胴部はかなり張っている。全体的に内・外面横位のナデである。25は壺もしくは壺の底部片である。底面はヘラによる成形が見られる。外面はナデで調整しており、内面はケズリを行った後に底面に指頭圧痕が施されている。26は台付き壺の脚台部である。脚台部が大きいので壺底の脚台部かもしれない。外面が斜位のハケ、壺の部分の内面も斜位のハケを行っている。27は台付壺の脚台部である。据部外面は縦位のケズリを行い、下の方はナデである。内面は縦位のケズリを行った後に縦位のナデ、上は指頭圧痕が施されている。胎土に小粒の礫を多量に含んでいる。脚台が大きいことから上は壺底の台付壺である可能性が高い。28は台付き壺の脚台部である。内・外面ともに横位のナデである。29は台付壺の脚台部である。台据部に打ち欠いている痕跡がある。内・外面ともにナデである。(小野)

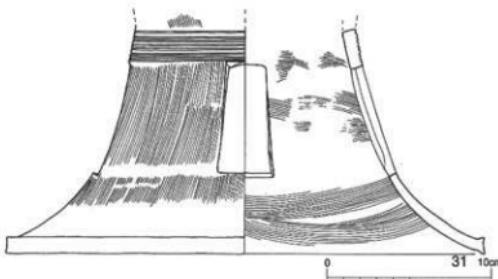


第13図 H区ウッドサークル出土遺物（1 / 3）

30は絵画土器である可能性が考えられる。絵画土器に関しては、雲仙市の対岸である熊本県菊池市の方保田東原遺跡などの出土が報告されている。長崎県内では現段階で、これと類似するような資料は見られない。今回、H区のウッドサークルから出土したものは長頸壺の口縁部である。この長頸壺の続きの破片や、似たようなものなどは出土していない。口縁部だけの残存率は60%である。拓本を見ると、かなり手が込んでおり、見た目が非常にお洒落である。口縁部は細身で、斜め上に真っ直ぐ伸びる。内・外面の全体的にミガキをかけた後、外面には2条を1単位とする横線が7本、その間に連続する三角形と逆三角形の模様が交互に、先の細いもので線刻されている。三角形と逆三角形中には貝を転がした様な点線の文様が施され、内面には高坏によく見られる暗文風の縦位の線が明瞭に残る。31は器台である。河川堆積からの出土の割に破片は非常にしっかりしている。半分は残っていないが、台形の透かしが4ヶ所施されているだろう。全体の大きさの割に透かしが小さいように思える。中央部分には8条の沈線文が見られる。外面は縦位のハケ、内面は透かしのある部分にはやや波打ち気味の横位のナデ、裾部分には斜位のハケが施されている。(小野)



第14図 H区出土土器（長頸壺）(1/3)



第15図 H区出土土器（器台）(1/3)

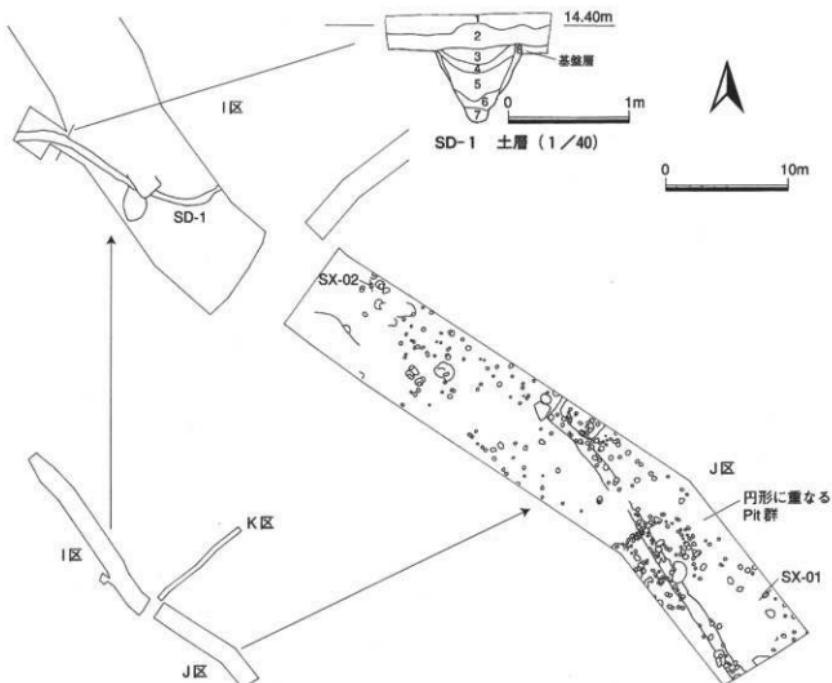
### 【引用参考文献】

- 安楽 勉・中田教之編 1985『櫻井田遺跡』長崎県文化財調査報告書第76集長崎県教育委員会・松浦市教育委員会
- 福島和明他 2006『門前遺跡』長崎県文化財調査報告書 第190集 長崎県教育委員会
- 町田利幸・宮崎貴夫編 1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書 第84集 長崎県教育委員会
- 山下美郷 2008『伊古遺跡（中世編）』雲仙市文化財調査報告書（概報）第5集雲仙市教育委員会
- 大橋康二 2004『世界をリードした陶磁器窯・肥前窯』シリーズ「遺跡を学ぶ」005新泉社
- 小野正敏編 2002『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会
- 大川 清・鈴木公雄・工業普通編 1996『日本土器辞典』雄山閣
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2009『土と炎－九州陶磁の歴史的展開－』固定展示室ガイドブック佐賀県立九州陶磁文化館中世土器研究会 1995『概説 中世土器・陶磁器』真陽社
- 中島恒次郎 2005『九州』『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会編
- 日本貿易陶磁研究会 1982『貿易陶磁研究会』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1972『九州地方の瓦器碗について一型式分類と編年試案－』『考古学雑誌』第59卷第2号 日本考古学会
- 森田 勉 1977『《研究ノート》太宰府出土の土師器に関する覚え書き(2)』『九州歴史資料館研究論集』第3集九州歴史資料館
- 森田 勉 1984『筑前系瓦器碗の成立過程』『古文化談叢』第14集九州古文化研究会
- 森 隆 1993『北部九州の瓦器生産』『古文化談叢』第30集（中）九州古文化研究会
- 森島康雄 2005『瓦器－編年と技術伝播』『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会編
- 矢部良明編 1997『やきものの観賞基礎知識』至文堂
- 矢部良明他編 2003『角川 日本陶磁大辞典』角川書店
- 山本信夫 1990『11・12世紀の貿易陶磁』『貿易陶磁研究』第10号日本貿易陶磁研究会
- 宮崎亮一編 2000『太宰府城跡 XV－陶磁器分類編－』太宰府の文化財第49集 太宰府市教育委員会

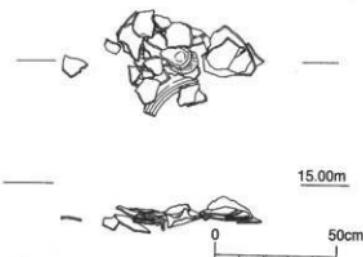
### J区・I区

I区では調査区南側で環濠と思われる溝（SD-1）が検出できた。この溝は、土層図を見ても分かるようにV字形を呈しており、溝の底部分は平になっている。肥後系の台付き壺の口縁部や底部片、壺棺の胸部片などが出土しており、弥生時代中期のものである。土層を見ると、レンズ状に流れ込むようにして土が堆積しているため、人為的にではなく時間と共に徐々に埋まっていったことが分かる。第8層まで分けることができ、第3層に遺物や礫が多く含まれている。F区やH区などで弥生時代中期の壺棺や土器が出土しており、この溝から出土した遺物も同じく弥生時代中期であるため、同じ時期に展開していたことが想像できる。

J区では、壺棺や住居跡と考えられるピット群が検出されている。耕作土からの出土であるが、須玖II式の壺の口縁部や底部片が多数見つかった。南側で検出された住居跡と考えられるピット群は、第16図を見ても分かるようにいくつか重なっているが円形になっている。何回か同じ位置に建てられた可能性が考えられる。J区北側のSX01では肥後系の台付き壺が破片になっている状態で検出されている。掘り形ではなく、耕作土内で出土したため明らかに別の場所に埋まっていた壺棺を取り上げて、再度埋めているようである。残存率は非常に低く、接合を行うとF区より大きい台付壺であった。1個体でさらに破片で出土したため、単棺だったのか合せ口壺棺であったのかは不明である。SX02か



第16図 伊古遺跡 I・J区 (1/400)



第17図 J区S X-01甕棺出土状況（1/20）

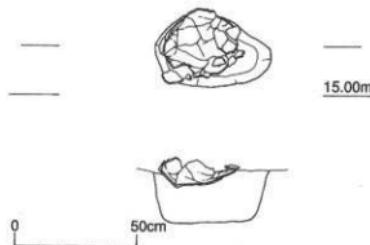
—J区S X-01出土土器—

32は台付甕である。口縁部は内湾しており、内側に突出している。胴部は上位に張りを持ち、底部には小さい脚台部が付いている。甕と脚台部接合部分は厚い。外面は突帶下より全体に縦位のハケを、内面は部分的にハケを行った痕跡が見られるが、上からナデを行っているため分かりづらい。（小野）

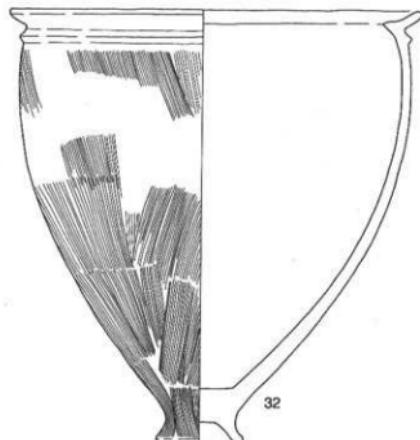
—J区S X-02出土土器—

33はおそらく須玖式の甕である。胴部中位から底部までが残存している。胴部中位に張りを持ち、細くなり、平底を呈す。全般的に器壁が薄く作られている。外面は4段階に縦位のハケを行っている。内面はナデや指頭圧痕が明瞭に残っている。（小野）

らは須玖Ⅱ式甕の胴部半分が残っている状態で出土している。底部が平底であることや調整の特徴などから、耕作土中から検出されているものと同じく鋤先口縁を持つ甕の胴部であることが考えられる。J区は北部九州系の須玖式土器を主に使っていたことが考えられる。さらにI区で検出された環濠よりおそらく内側に位置していると言える。（小野）



第18図 J区S X-02甕出土状況（1/20）



第19図 J区S X-01・S X-02出土土器（甕棺・甕）（1/6）

## 第2節 弥生時代終末～古墳時代初頭

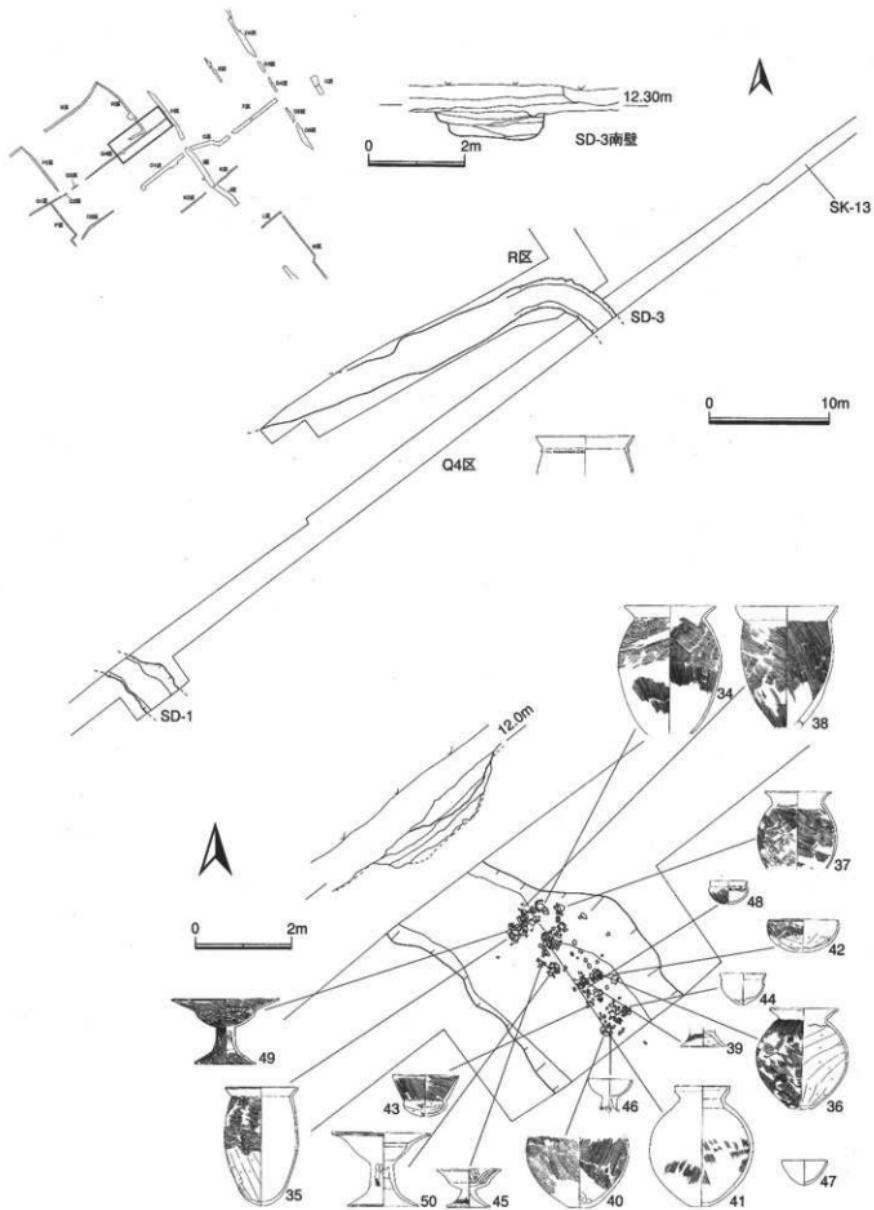
### -Q区SD-1・SD-3検出状況-

Q4区は現況の水路が圃場整備事業によって拡張となる部分である。現況の水路部分はかなり深い部分まで掘削されており、遺構面はすでに削平されていると予想され、調査は水路の拡張部分のみ行った。第20図を見ても分かるように、Q4区の調査区を横断するように、2本の溝状遺構が検出されている。いずれも幅約3.5mの逆台形である。

SD-1は弥生時代後期から終末にかけての土器を含み、調査区北側ではやや西に向かってカーブするものと思われる。溝の検出面は中世以降に削平を受けており、当初の掘り込み面は確認できない。溝検出後すぐに多くの遺物が密集して検出されており、図中にその検出状況を示している。遺物の集中が38付近で途切れているが、北側が中世以降の土坑によりかく乱されており、遺物の集中がその先も続いている可能性がある。土層図（南側土層に実測図を反転し掲載している）を見ると、溝は2時期確認される。古い溝の埋没後、新たな溝が掘られていることが分かる。遺物の集中部分は溝検出後早々の出土で、東側へ偏った検出状況から、新しい溝に伴うものであることは明白である。古いほうの溝からの遺物は細片ばかりで、時期を特定できず、溝の存続期間を明確にすることはできないが、新しい溝が古墳時代初頭にはすでに埋没し始めている状況がうかがえる。検出された遺物は、特徴的な長胴甕（35）など、県内では検出例が無いものも含まれる。遺物の全体的な様相は熊本の方保田東原遺跡のものと類似する。出土遺物の中には胎土に角閃石（在地の粘土には必ず含まれる）がまったく含まれないもの（先述の長胴甕も）もみられ、搬入品であることは間違いない。49の高坏は菊池市西弥義面遺跡で出土している、鉢形高坏に形状や質感が良く似ている。出土遺物の一部は熊本地方からの搬入品の可能性が高い。検出された遺物は、新しい溝の底面付近で検出されており、完形に復元できるものや、ほぼ完形近くまで復元されるものが含まれている。単なる廃棄か、または、溝を埋める際の祭祀的なものか、判断は難しい。

SD-3はQ4区からR区にかけて検出され、SD-1から北東へ30m付近で検出されている。調査範囲が狭小で、溝の詳細が分かりにくかったため、その延長を確認するため、R区を拡張し検出を行った。完掘した部分は、第20図SD-3検出図の下場ラインのあるコーナー部分のみで、それ以外は検出面まである。第20図のとおり直角に近い角度で南西方向への伸びている様子が伺える。溝の規模はSD-1の古い時期のものとほぼ同様で、SD-1のように新しい溝は検出できない。土層の堆積状況や遺物の検出状況もSD-1の古い時期のものと似ており、時期的に近いものかもしれない。また、調査時には同一の溝の可能性も考えたが、工事範囲との都合上確認までは至らなかった。

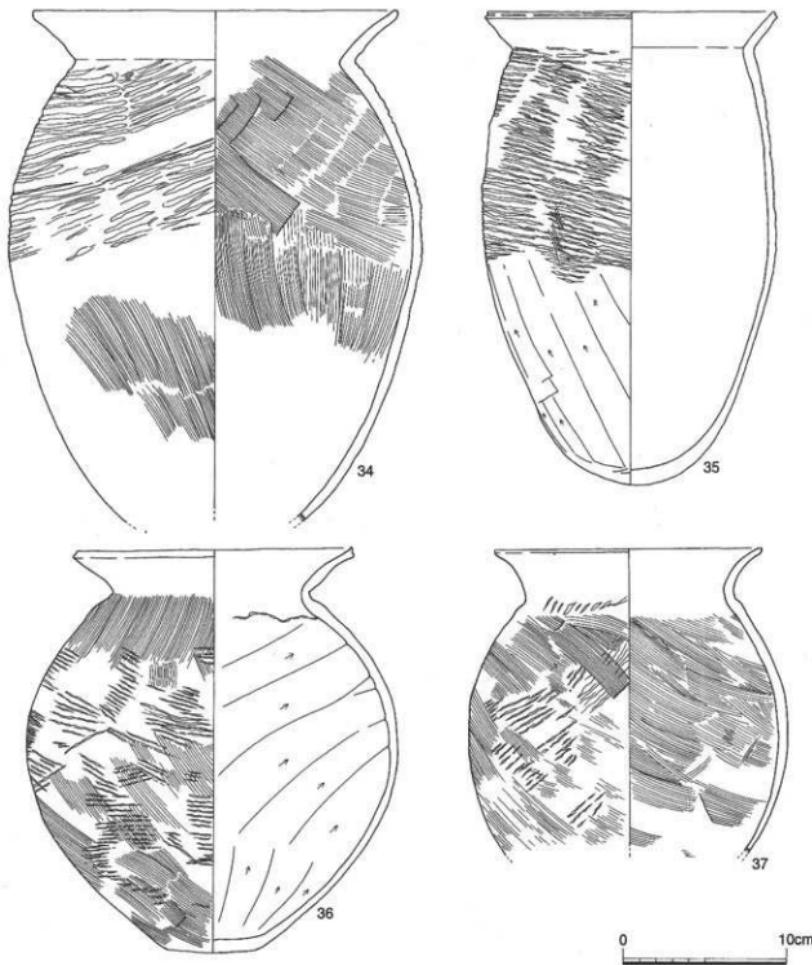
SD-1やSD-3が検出された場所は比較的土層の堆積がよく、溝の深さが50cm以上検出されているが、SD-1の西側では遺構検出面が50cm近く下がる。近世以降の削平によるもので、SD-1やSD-3が仮にSD-1より西側で南方向へ進路を変えていたとしたら、検出できていない可能性がある。SD-1とSD-3の間については同様の遺構やSD-3の続きなどがあるかもしれないということを精査したが、検出にはいたらなかった。（小野）



第20図 Q区 SD-1・Q・R区 SD-3検出状況 (1/400)  
Q区 SD-1土器検出状況 (1/100)

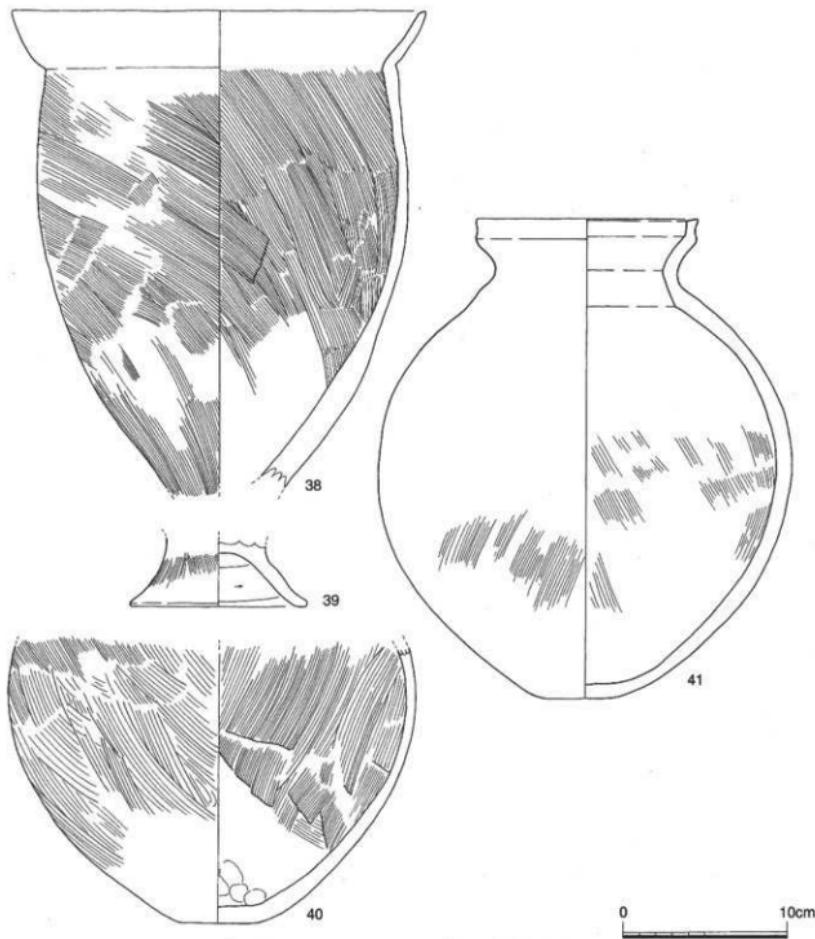
## 一出土土器一

34は壺である。壺の口縁部から胴部中位までが残存しているものと、頸部から胴部下位までが残存している破片とあった。その2点は接合できなかったが、調整や胎土の特徴などから明らかに同一個体と考えられるため、図面上で復元している。底部は欠損しており不明。胴部は全体的に張っており、頸部は締まりがよい。口縁部は外反しており、端部は内側に丸くおさめている。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、胴部外面は中位までが右上がりのタタキ、その下には斜位ハケを施している。胴部内面は中位までが斜位のハケ、その下が継位のハケを行っている。35は長胴壺である。島原半島ではまだ出土例が見られていない肥後系の壺である。底部は丸底を呈し、胴部は最大径が口径よりも狭く、全体的に長細くラグビーボールのような形状をしている。口縁部はやや波打ちながら外反し、断面方形の口唇部は中央部がくぼんでいる。外面は、口縁部が横位のナデ、部分的にタタキが見られ、頸部から胴部中央まで右下がりのタタキ、その下に下から上方向へのケズリを行っている。底部にはミガキを行っている。内面は、口縁部が横位のハケ後横位のナデ、胴部上位は斜位のハケ後にナデ、底部はケズリだがナデで整えているようである。36は壺である。底部は平底を呈しており、胴部は中央に膨らみを持ち球形で、頸部は締まりがよく、口縁部は非常に外反し開いている。上部が水平に近く、口唇部が直立している。口縁部は内・外面ともに横位のナデを行っている。胴部外面は全体に右下がりと水平のタタキを施した後、頸部から下に向ってと、底部から上に向っての継位のハケを行っている。内面は頸部直下には接合した痕跡が明瞭に残っており、その下は下から上に向って継位のケズリを行っている。37は壺で、底部は残存していない。胴部は球形を呈し、頸部は締まりが非常に悪くだらっとしている。口縁部は非常に外反し開いており、端部は丸くおさめている。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、胴部外面は右上がりにタタキを行い、右斜め下に向って斜位のハケを行っている。胴部内面は回転を利用した斜位のハケである。38は台付き壺である。底部は欠損しており不明だが、下に行くほど細くなっている。胴部は中位より若干上が張っており、頸部は締まりがやや甘い。口縁部は内湾しており、口唇部は面取りを行っている。外面は、口縁部が横位のナデ、胴部が斜位のハケを行っている。内面は、口縁部が斜位のハケ後に横位のナデである。39は台付き壺の脚台部である。残りがよく、台裙部はスカート状に開いており、裾端部は丸くおさめている。外面は継位のハケ後横位のナデ、内面は回転を利用したケズリ後に横位のナデを行っている。40は壺もしくは壺の胴部から底部である。底部は凸レンズ状の平底を呈している。胴部中位は非常に膨らんでおり、頸部で締まる形になると思われる。外面は太いものと細い斜位のハケを行っている。内面は斜位のハケ、底部には指頭圧痕が明瞭に残る。41はほぼ完形の在地系の複合口縁壺である。底部は平底、胴部は中央部分が張っており球形を呈す。頸部は締まっておらずに1次口縁は外反、その上に直立した2次口縁が付く。口唇部は内側に斜めに切れている。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、胴部外面は全体的に斜位のハケを行っている様だが、器面の磨耗や剥落がひどいため分かりにくくなっている。胴部内面は上位が器面の剥落のため分からず、中位から下は斜位のハケ、底部には指頭圧痕が明瞭に残っている。42は完形の大型鉢である。前に図示している長胴壺と非常に似た胎土である。全体的に内湾しており、底部は丸底。口縁部付近には2条の沈線が施されており、底部は、鉢をひっくり返してケズリを行った様に思われる。そしてケズリの方向がバラバラである。内面は、底部から上に向って回転を利用した継位のハケ、しかし、内湾の始まる部分辺りからは横位のナデで整えている。43は小型丸底壺である。口縁部が長く斜め上に真っ直ぐ伸びて非常に発達している。頸部は締まりが甘くややへこんでいる。胴部・底部は丸くなっている。外面は口縁部が継位のハケ、胴部はケズリを行いつの後ハケとナデである。内面は口縁部が斜位のハケ、胴部は回転を利用したケズリの後にナデと指頭圧痕が明瞭に



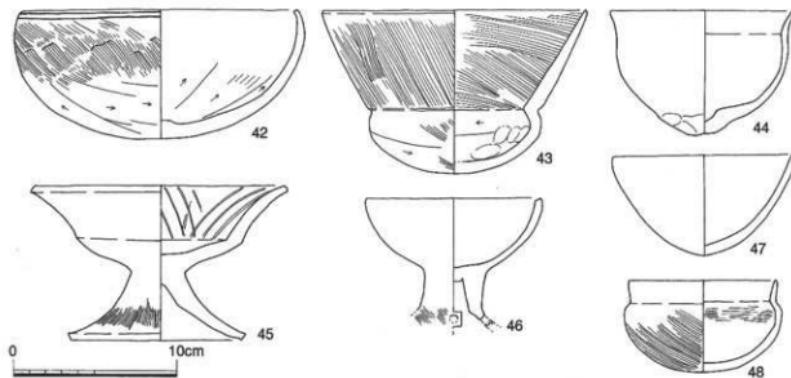
第21図 Q区出土土器(断面)(1/3)

残っている。44は脚台付きの鉢部である。脚台部との接合部分が分かるが、接合がいまいちうまくいかなかつたのか脚台部が残っていない。胴部に膨らみを持ち、口縁部はやや内湾する。外面はケズリ後に継位のナデ、口縁部には横位のナデを行っている。内面は回転を利用した横位のケズリ、その後横位のナデで整えている。口縁部には指頭圧痕が明瞭に残る。45はほぼ完形の高坏である。小型の高坏で、口縁部は外反しており、口唇部は丸くおさめる。坏部下半はあまり丸くはなっておらず、台裾部はしっかりとと明確な脚柱部はなくだらっとスカート状に開いている。台裾部端は断面方形を呈す。坏部外面は、口縁部がケズリの後に回転を利用した横位のハケと横位のナデ、坏部下半はケズリ後継



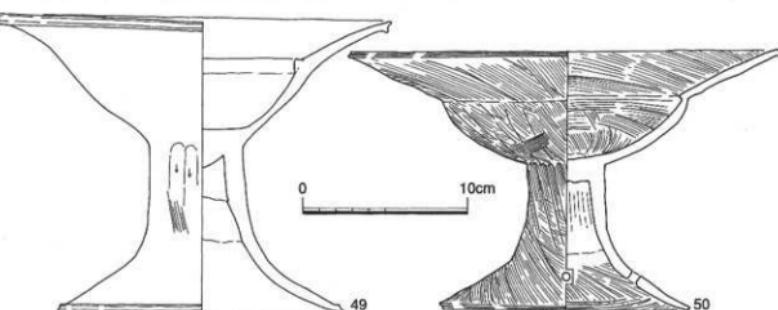
第22図 Q区SD-1出土土器(甌・壺) (1/3)

位のナデ、坏部内面はケズリ後口縁部に暗文風のミガキ、坏部下半はナデを行っている。台裾部外面は、綫位のケズリ後ミガキを行い綫位のハケ、内面は回転を利用した横位のケズリ後ナデを行っている。46は脚台付きの鉢である。台裾部のみ欠損しており、脚柱部は細くて短く、その上にお椀状の坏部が乗っかっている。脚台部には4ヶ所の孔が開けられている。外面坏部は大部分が剥落しているが、回転を利用した横位のナデが分かる。脚台部も同じく剥落しているが、裾部分は綫位のハケを行っているようである。坏部内面は、外面と同じく横位のナデ、脚台部は横位のケズリを行っている。47はV字型で底部は尖底の鉢である。全体的に横位のナデを行っており、その後暗文風のミガキを行った痕跡がある。残存率が25%である。48は短く直立した口縁部が付く鉢である。底部は丸く、頸部が締



第23図 Q区 S D-1 出土土器 (鉢・高坏) (1/3)

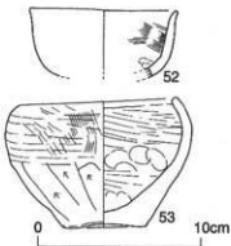
まっている。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、胴部外面は底部から上に向って回転を利用した継位のハケ、胴部内面も同じく回転を利用した横位のハケで、底部はナデを行っている。49は完形の高坏である。口縁部は外反しており、坏部との屈曲部内面に突出部分を持っている。口唇部は面取りを行った後に中央部をへこませている。台裾部端も口唇部と同じである。脚柱部は太く、台裾部径は口径の約半分である。坏部下半はあまり丸くなっておらず、だらっとなっている。脚柱部は太く、台裾部は開く。全体的に回転を利用したケズリの後にナデを行っており、接合痕が明瞭に残っている。脚柱部にはケズリの単位とその後行った継位のハケが明瞭に確認できる。50はほぼ完形の高坏である。形から、肥後系と考えられる。角閃石が全く見られず、胎土が非常に精製されており、調整などのが丁寧であるため搬入品の可能性が高い。口縁部は長く伸びており、坏部下半は浅い鉢状で丸くなっている。こちらも同じく口縁部と坏部の屈曲部に突出部分を持っている。脚柱部は細く短く、台裾部径は口縁部径の約半分である。脚台部全体に回転を利用した斜位のハケを行い、脚柱部のみその上から継位のハケを施している。坏部は斜位のハケ、脚台部には3つの孔が開いている。内面は、口縁部・坏部下が回転を利用した横位のハケ後にナデを行っているためハケが消えかけている。脚柱部はねじって作ったような痕跡が残り、継方向にきれいに削っているのが分かる。台裾部は回転を利用した斜位のハケを施す。調整が全体的に非常に丁寧に行われていることから、装飾性があることが考えられる。



第24図 Q区 S D-1 出土土器 (高坏) (1/3)

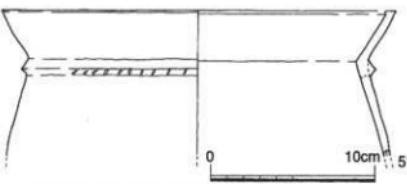
第25図は、Q区SD-3で出土した壺の口縁部から胴部である。破片は何点かあつたが、接合はできなかった。口縁部はやや内湾氣味であり、頸部には断面三角形の突帯が1条貼り付けられている。その突帯には刻み目が見られる。胴部はあまり膨らみがない。内・外面ともにナデで仕上げている。その他にも、壺や壺の破片は含まれていたが、接合できるほどの大きさのものではなくいずれも判然としないものであったため今回は図示していない。

第26図は、Q区SD-3からやや東側に行った部分のSK-13で出土した鉢である。52は破片資料であるが、おそらく底部が丸底の小ぶりな鉢である。やや波打ちながら伸び、口縁部では若干外反する。



第26図 Q区土坑出土土器 (鉢) (1/3)

頸部の長さは短いタイプの壺で、頸部と口縁部に屈曲があり、下方に開いているため、新相のものである可能性が高い。外面は全体的に横位のナデを行い、口唇部には5条の沈線を施しその3条目には刻目文が見られる。頸部は縦位のハケを行いその上から羽状文、その下には2条の波状文を施している。内面も全体的に横位のナデ後に口縁部に波状文を施している。55は壺の口縁部片である。吹越式土器の形状に似ており、逆「く」の字を呈している。口唇部は断面方形である。外面は1次口縁には横位のナデ後に回転を利用した斜位と縦位のハケ、2次口縁には横位のナデ後に横位のハケである。内面は1次口縁は斜位のハケ、1次と2次の接合部分にはケズリ、2次は横位のナデを施している。56は台付壺の脚台部片だが、結構大きいため、上の壺部分も大きくなるだろう。台裙部は外反しており、端部を上に摘み上げている。内・外面ともに全体的に横位のナデを施している。57は小型丸底壺である。底部は丸底を呈し、頸部は綺まりが甘く、口縁部は長く斜めに伸びている。全体的に回転を利用したハケを内・外面ともに行い、外面のみミガキで仕上げている。58はミニチュアの器台である。破片資料であったため、図面は反転復元を行っているが、下の方は裾が広がっており、上の方の内面には沈線らしきものを確認することができ、上下を意識して作成していることが分かる。全体的に横位のナデと指頭圧痕で整えて仕上げている。(小野)

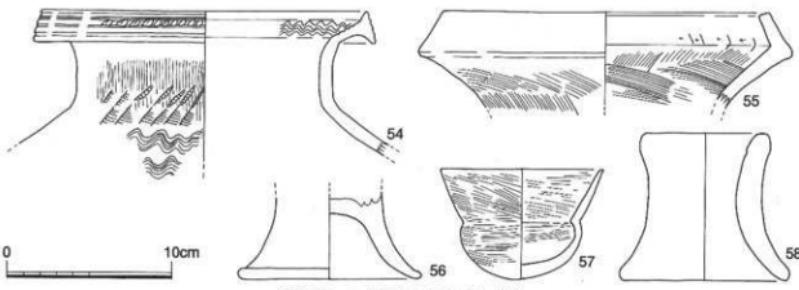


第25図 Q区SD-3出土土器 (壺) (1/3)

外面はナデ調整を行っており、内面には部分的にハケが残る。53は完形の状態で出土している。底部は中央がややくぼんでいるが平底を呈し、胴部中央から口縁部にかけて非常に強く内湾している。外面は胴部中央までケズリを施し、その上には斜位のハケを行っている。内面は胴部中央まで指頭圧痕が明瞭に残り、その上には横位のハケを行っている。(小野)

#### 参考資料一

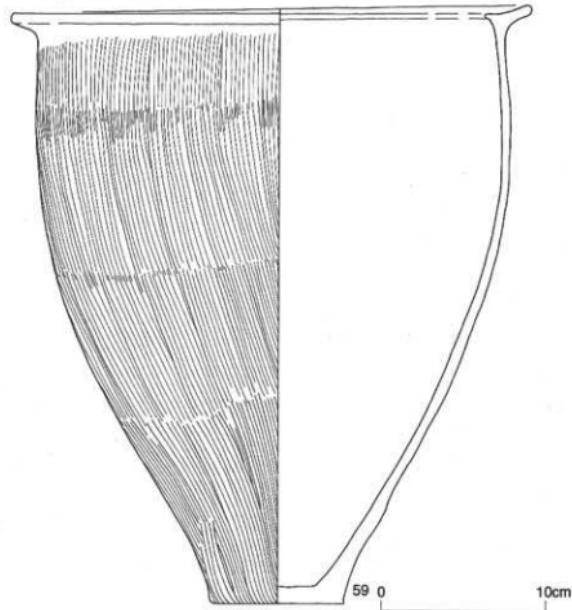
第27図は、D3区で出土した土器である。全て遺構に伴つたものではないが参考資料として図示している。54はおそらく上東式の壺破片であることが考えられる。長頸壺だが、



第27図 D 3区出土土器 (1/3)

- J T-1 出土土器 (須玖式甕) -

J区の延長上、南側の一段高い場所に設定した試掘坑である。伊古遺跡で設定している土層の第Ⅷ層（弥生時代の遺物包含層）より図版4の7・8の写真で見られる状態で出土している。写真を見ても分かるように、置かれていた状態の甕が倒れ、その後土の重みなどで潰れてしまったような様子が伺える。試掘坑北側の角には焼土が溜まっている状況が確認でき、J T-1 には少なくとも2軒の住居跡があった可能性が高い。第28図に示しているものは写真に見られた須玖式の甕である。弥生時代中期後半辺りの時期に属するもので、出土した地点はおそらく住居跡のほぼ中央部分であったことが考えられる。底部は平底で、胴部は長胴である。口縁部はT字の鋸先状口縁部を呈している。外面は底部から上に向かって縦位のハケ、口縁部と口縁部下が横位のナデを行っている。内面はケズリ後にきれいにナデを行っているようである。この甕が検出された第Ⅷ層からは、他にも、同じ須玖式の特徴を呈する甕や高杯、壺などの破片が多数出土している。高杯の破片では口縁部分が見られ、短めの鋸先状口縁を呈している。甕は外面を非常によく磨き、やや赤色が見られるためいわゆる丹塗磨研土器に類似するものが見られた。これらのことから、この第Ⅷ層出土物は全て、北部九州系の須玖式の特徴を持っていることが分かり、時期はおそらく弥生時代中期後半であることが推測できる。その中でも肥後系の台付甕の脚台部片も見られた。鋸先状口縁に何らかの理由で穿孔を行っている破片もあった。（小野）



第28図 J T-1 出土土器 (甕) (1/3)

弥生時代～古墳時代

## 第3章 中世

### 第1節 検出遺構（第29図～第35図、図版5）

中世の遺構としては、すでに報告（山下2008）しているとおり、道路状遺構や竪穴状遺構、製鉄関連遺構などが検出されている。出土遺物から見ると11世紀～16世紀にかけてのものが見られるが、その中心となるのは12世紀～13世紀と予想される。今報告では土坑墓及び掘立柱建物について報告する。

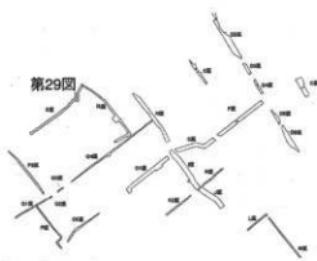
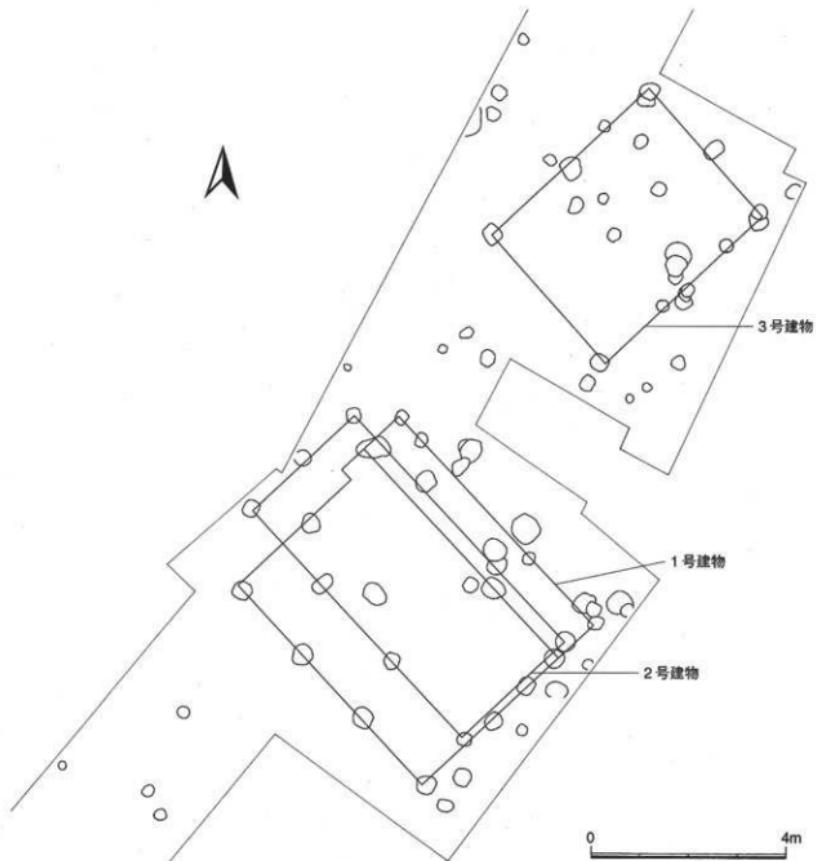
中世の遺構が検出される場所は、遺跡の広い範囲にわたっているが、遺跡の東北側、丘陵に近い部分で多くの検出が見られる傾向にある。D 2区～D 6区で竪穴状遺構・旧河川・製鉄炉跡・柱穴群、E区で道路状遺構・製鉄炉跡が検出（山下2008）されている。今報告ではS区から検出された掘立柱建物群、H区の土坑群、C区の土坑墓について紹介する。それ以外の地区でも柱穴と考えられるものや溝と考えられる遺構等、中世頃と考えられるものが散見されるが、明確ではない。

#### 一掘立柱建物群

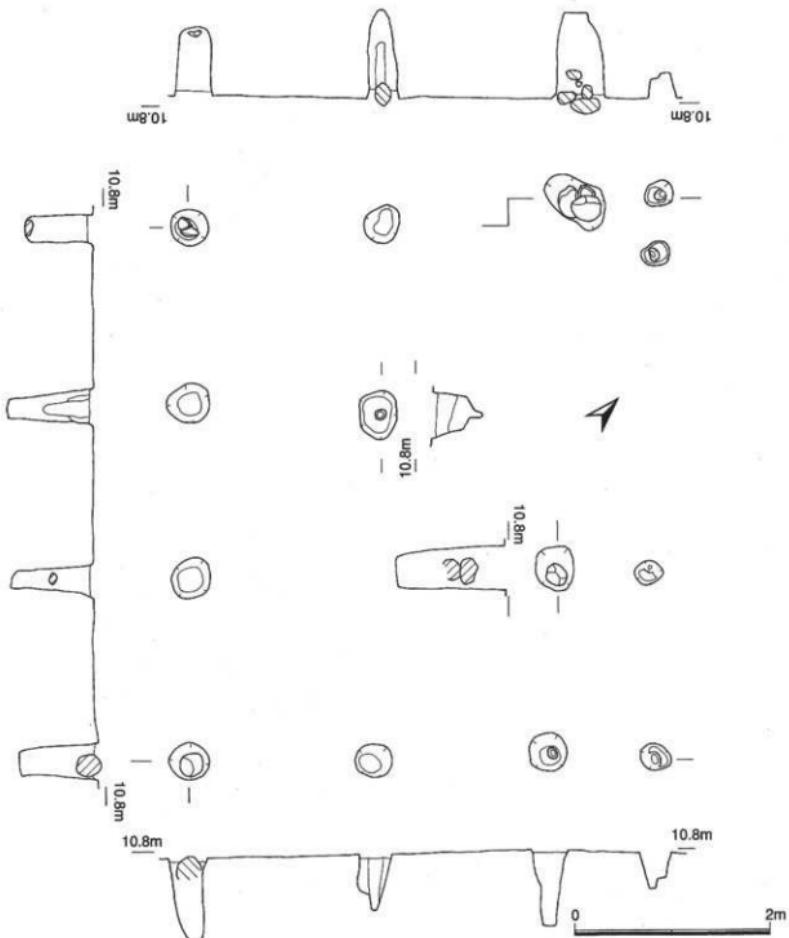
S区より3棟の掘立柱建物（次頁第29図）が検出されている。S区は現況の道路脇に設定された調査区で、幅3mほどの細長いトレンチ状の調査区である。耕作土除去後、20cm～30cm程で、遺構確認面である黄色粘質土の硬くしまった土層に達する。包含層はほとんど残っておらず、遺構面直上は耕作によるかく乱もしくは水田床土である。建物群は径30cm～50cmほどの柱穴で構成されており、深さ1mを超えるものも見られる。調査当初、遺構確認面で検出された柱穴の一部が等間隔で直線状に並ぶことから、その延長線上を確認するべく調査区を拡張している。S区は全長100mを越える調査区であるが、建物群が検出されたのは最も東寄りの、R区に近い部分である。それ以外の部分では柱穴状の遺構が散見されるものの、建物跡となるようなものは検出されていない。建物群の検出された部分はH区・R区から続く旧河川跡の脇で、R区中央付近の拡張区でも大きめな柱穴状の遺構が検出されている。後世のかく乱が著しく建物跡の復元には至らなかったが、周間に建物群が残されていることが予想される。この河川の対岸（H区）からは中世の土坑群（後述）も検出されており、一帯に建物群等の集落の一部が展開していた様子が伺える。すでに報告（山下2008）している竪穴状遺構や製鉄炉跡は、D 2区～D 6区にかけて検出される旧河川脇で検出されており、遺跡の東半分に流れる2本の旧河川跡付近に、中世の集落が広がっていることが予想される。この旧河川跡のちょうど真ん中のE区では、70mを超える敷石を施した道路状遺構が検出されている。この道路状遺構は真北から35度前後西側へずれた状態で、おおむね直線状に検出されている。道路の西端が調査区外へ広がっていることや延長線上の状況が不明なことから、道路幅や正確な傾きは不明である。S区で検出された3棟の建物はE区の道路状遺構から200mほどの距離で検出されており、建物の傾きは真北から約42度である。道路状遺構とびたりと角度が一致することは行かないが、道路状遺構と建物群の間に何らかの規制があると考えられる。すなわち、道路状遺構も建物群も集落を構成する規制に従って、整然とおおむね同じ向きに建設されていることも考えられる。後述するが、伊古遺跡では中世の貿易陶器類や土器類・瓦器など、かなり規模の大きな集落が存在していたであろうことが明白であり、計画的に建設された大規模な中世集落の様子が伺える。（辻田）

#### 【参考文献】

山下美郷 2008 「伊古遺跡」 霧仙市文化財調査報告書（概報）第5集 長崎県霧仙市教育委員会



第29図 S区掘立柱建物検出状況 (1/100)



第30図 S区 1号掘立柱建物 (1/50)

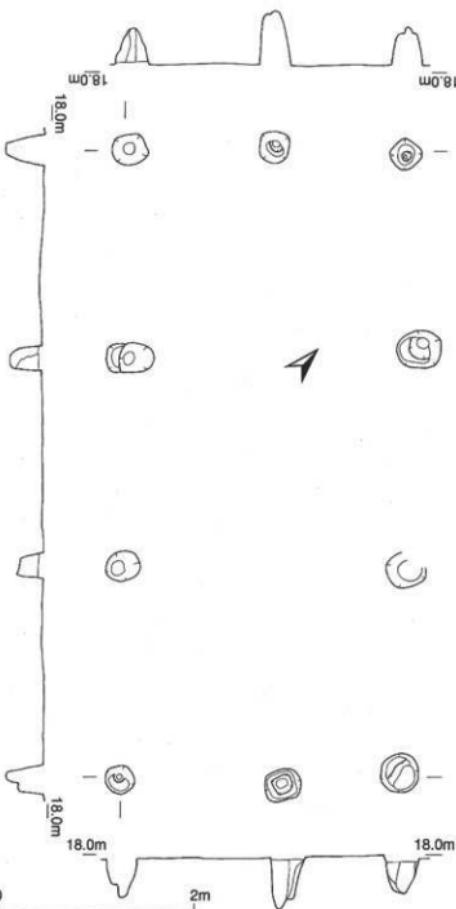
#### — 1号掘立柱建物 —

桁行3間、梁行2間、北東側に庇をもつ可能性がある。柱穴の大きさはおおむね同じで径40cm程度である。深さは深いもので1mを測る。建物の主軸方向はN-42°-W。桁行は、柱の中心部分で、南西側で5.5m、北西側で5.7m。梁行も同じく柱の中心部分で、南東側で3.7m、北西側で3.9mを測る。数字が一致しないのは最も北側の柱穴が、桁行方向も梁行方向も20cm程外側で検出されているためである。また、北東側の北から2番目に相当すると考えられる柱穴については検出されず、その代わり、棟部分北西側から2番目に相当する部分にやや浅い柱穴が検出されている。柱痕跡の残る柱穴の状況

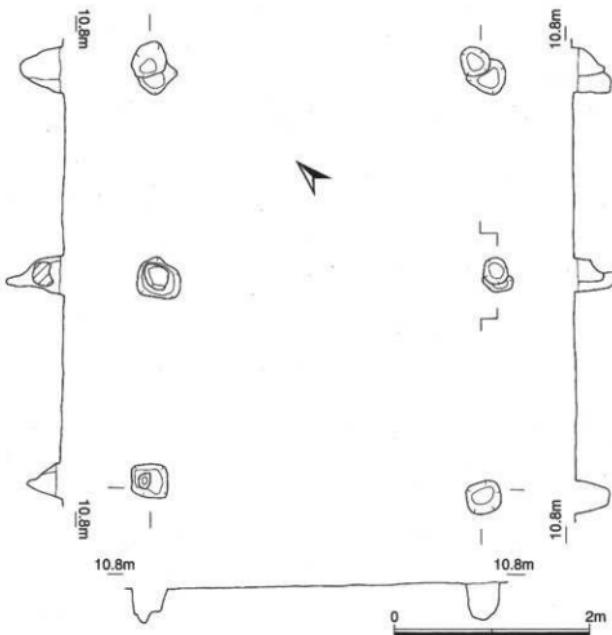
から、柱穴の底面と柱そのものの底部は必ずしも一致しない。また、断面図を見ても分かるが、柱を抜いた後、その穴に人頭大の礫を入れ込んだ状況が観察される。内部に落ち込んでいるものも見られるが、多くの礫は「蓋」状に最上面に残っている。建物解体時の祭祀的行為であろうか。他の市内遺跡調査においても、中世の掘立柱建物の検出時に比較的多く見られる。中には、礫の下が空洞になっているものもある。遺構検出面よりも礫の最上面が上にあることから、掘立柱建物の遺構検出面は、後世の削平によるものではなく、建物廃棄時の地表面を残していることが伺える。梁行方向の柱穴の様部分（真ん中の柱）は断面形状が先細りとなっており、他の柱穴と異なる形状となっている。また、底部分と考えられる柱穴は建物本体のものより一回り小さく、深さも半分以下である。若干はみ出した建物本体の最も北側の柱穴に添うように2基の柱穴が並ぶ。また、建物本体と同じように、北東側の北から2番目に相当すると考えられる柱穴については検出されなかった。（辻田）

#### - 2号掘立柱建物 -

1号掘立柱建物に重なるように検出されているが、柱穴の切り合い関係はなく、前後関係は判然としない。桁行3間、梁行2間で、柱穴の大きさはおおむね同じで径30cm～40cm程度である。深さは50cm前後で、1号掘立柱建物に比べると全体的に浅いため、遺構掘込み面が削平されている可能性もある。すると、1号掘立柱建物は当初の地表面が残されているであろうことを考えると、2号掘立柱建物→1号掘立柱建物の時間の流れを想定することもできる。建物の主軸方向はN-42°-W。桁行は、柱の中心部分で、6.8m。梁行も同じく柱の中心部分で、2.8mを測る。桁行方向の柱穴はほぼ等間隔に並ぶものの梁行方向の柱穴の間隔は不統一である。1号掘立柱建物に見られるような礫を入れ込んだような痕跡は検出されなかった。ただし、検出された柱穴の深さでは安定した建物の柱が建てられるのか疑問が残り、本来は1号掘立柱建物と同様の深さを持っていたとすると、入れ込んだ礫が検出されないことや、柱穴の平面形状が1号掘立柱建物に比べて一回り小さいことなど、本来は1号掘立柱建物と同様の大きさの柱穴であったことも予想される。（辻田）



第31図 S区2号掘立柱建物 (1/50)



第32図 S区3号掘立柱建物 (1/50)

#### - 3号掘立柱建物 -

1号・2号とは約4m離れた地点で検出され、建物の主軸が前2棟と90度ずれる。桁行2間、梁行1間であるが、桁行については北側調査区外に伸びている可能性もある。調査時に確認することができなかった。柱穴の大きさはおおむね同じで径30cm~40cm程度である。深さは50cmに満たないものがほとんどである。1号掘立柱建物に比べると全体的に浅いため、遺構掘込み面が削平されている可能性もある。1号掘立柱建物と同様に柱穴内に人頭大の礫が入っているものも1基検出されている。桁行は、柱の中心部分で、4.4m。梁行も同じく柱の中心部分で、3.5mを測る。桁行方向の柱穴はほぼ等間隔に並ぶ。また、一部で柱穴の切り合い関係がみられ、1度建替えられていることが予想される。梁行方向の間隔が2.8mと、1間としては非常に幅が広い構造となっている。(辻田)

第1表 S区検出掘立柱建物群構成表

建物名称	桁行×梁行	規模(m)	主軸方位	備考
1号掘立柱建物	3×2	5.5×3.7 (5.7×3.9)	N-42°-W	北東側に庇か
2号掘立柱建物	3×2	6.8×2.8	N-42°-W	梁行間隔不統一
3号掘立柱建物	2?×1	4.4×3.5	N-42°-E	梁行間隔広